

白塚喬太郎談話速記

白塚喬太郎は新町三井家の執事である。伊勢松坂に生れ、幕末期は松坂町大年寄書記として町会所に勤務し、松坂の三井家との交流から維新後には横浜に出て、三井銀行の各地営業所勤めを経験したのち、新町三井家の執事となった。この経歴をもとに明治四四年（一九一）七月一八日、三井家編纂室より柴謙太郎が、東京麴町の新町三井家を訪問して採取したのが「白塚喬太郎談話速記」である。記録は長谷川篤が取っている。

この談話速記は〔其一〕、〔其二〕と二冊あって、丁度分量的に半々位のところで分けられている。〔其一〕には白塚喬太郎の三井家の執事となるまでの経歴談とともに、松坂銀札の実務的な取扱いや、紀州藩五方国通用札製造にまつわる経験談、紀州や東海道の定宿について、また松坂の三井家当主の幕末維新期の動向についての逸話などが収録されている。

これに対し、〔其二〕は話の内容がガラリと変わり、昼食を

とった後の何気ないおしゃべりから始まった感のある、三井家の先祖談議となる。三井家の遠祖調査は三井家編纂室の重要な課題の一つであり、どちらかというと柴謙太郎の方が調査研究の内容を白塚に熱く語り込んでいる。

両冊とも、ところどころに柴の手が入り、また遠藤佐々喜、齋藤隆三と覚しき朱筆の書込みもある。

白塚への談話聴取は過去にも一度行なわれていて、「稿本三井家史料」中に断片的に引用されているが、まとまって残されたものはない。ここでは数回に分けて聞取が予定されていたようで、表題の下に（第一回）とある。がこのあと第二回、三回が実施された形跡はない。明治四四年七月に第一回目が実施されて二年後の大正二年（一九一三）九月に、白塚は長病いの末七三歳で死亡している。

白塚喬太郎に関しては三井に入る以前の経歴は、この談話

速記に収まったもの以外にさほどの手掛りはない。生れは勢州松坂日野町である。生年月日は不明であるが、この談話の中の「鳥居坂さんの御先代の宗十郎さんと言った方、木屋町様の弟御様（中略）私と同年でした」という記述から推定できる。鳥居坂さんとは、旧松坂北家、現永坂町三井家の明治二九年から大正六年までの住居地からとった呼称である。木屋町様とは、明治一九年京都木屋町に隠居した北三井家九代高朗を指す。そこで一一三ページ右下の「北三井家と松坂北家との関係略系図」をみてみよう。北三井家高朗の弟で松坂北家へ養子に入ったのは高猷である。白塚の生年は高猷の生年、天保一年（一八四〇）と同様としておく。親が医師取締役⁽¹⁾だったことから、松坂町大年寄の三井家と懇意となり、その関係で一五、六歳で大年寄の書記となったとある。それが安政二、三年頃（一八五五、六頃）である。廃藩置県後は民政局市長となった三井高猷の元で、請われて書記を勤め、更に山田にある三重県出張所で区長心得を拝命したが、病氣を理由に辞職し、その後横浜に出て三井銀行横浜分店に勤務することになった、という。

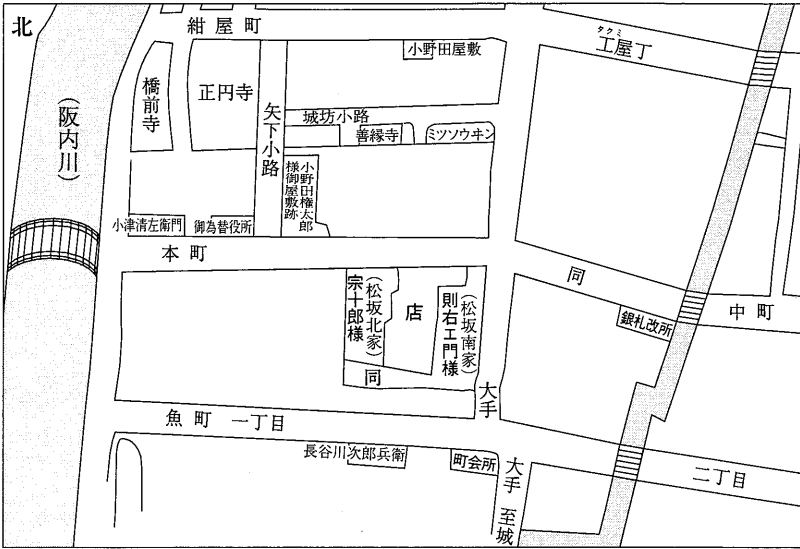
ここまでが本人の記憶に基づく経歴であるが、「等席人員調書」⁽²⁾によると白塚の入店は、明治六年二月であり、横浜御用所の平手代末席であったことが判っている。ということとは白塚は三二、三歳位から三井に入ったことになる。

以下明治七年二月十一等、翌八年一月から銀行創立後一年頃まで十等、明治一二年から同一五年まで九等支配役、一六年から八等となり横浜三井銀行の新築工事に携った。明治二〇年に名古屋出張店、後神戸を経て、二五年に大坂勤務、二六年東京本店営業課勤務罷役で終わっている。その後明治三〇年（一八九七）六月、新町三井家高辰の要請を受けて、同家の執事になった。それが五七歳、そして明治四四（一九一一）年、七一歳の今に続いているという訳である。

ところで白塚喬太郎は、松坂銀札の扱いに習熟していたようだが、経歴をみる限り銀札会所にとのような形で関わったのかはよく判らない。銀札会所には、御為替組及び三井組から二〇人宛出勤し、実際に三井店の勤仕者は同苗代理一人位で、あとは旧手代などが名儀を受けて行ったという。五方国通用札の方は、白塚自身が三井篤二郎に従って、実際に大坂に出掛け、銀札発行準備に携ったとある。大年寄書記の御為替三井組への私的勤務といったところであろうか。紀州藩発行の銀札については北島正元編著『江戸商業と伊勢店』（吉川弘文館 一九六二年）や『三井事業史』本篇一、藤田貞一郎『紀州藩における藩札の史料と研究』（日本銀行金融研究所、一九八八年）にまとめられているので参照されたい。

ここでは、白塚の談話の内容と関る、幕末維新期における松坂三井家について軽く触れておくこととする。

第1図 松坂店周辺図

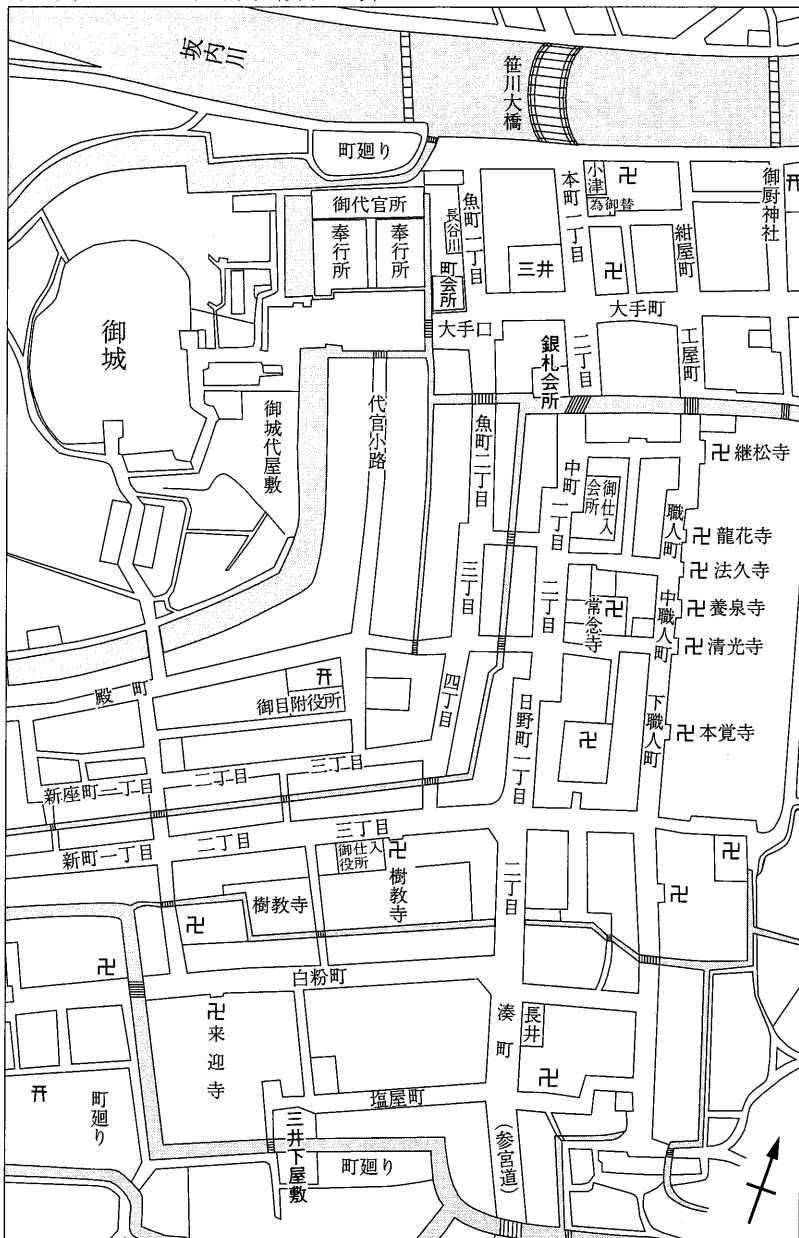


注)「寛政七乙卯春撰写松坂絵図」(三井文庫所蔵史料 本1293-1)より作成。

【松坂の三井家について】松坂は三井家にとって、家祖高利の出生の地であり、勢州木綿の仕入店がある。また享保七年(一七二二)に制定された家訓「宗竺遺書」に、万が一諸国大変となり、渡世なりがたき時や、天下一統の御儉約にて商体を保てなくなった時は、惣領家のみを京都住宅とし、残る同苗は全て勢州に引越す積りとせよ、とあるように、万が一の場合の三井一族の疎開先に指定され、またある時は、不行跡を働いた同苗に罰として与える謹慎の地でもあった。松坂には三井家の紀州藩の領民としての戸籍があるのであり、何かの折には藩の御用を勤めねばならなかった。

三井の営業店舗といえば、京、江戸、大坂の越後屋呉服店グループ(本店一巻)と両替店グループ(両替店一巻)を思い浮かべがちであるが、全店舗を統轄する大元方の直下には、右の両一巻の他に前述の松坂店がある。松坂店は店員数二〇名程の規模の、江戸向店に送る勢州木綿の仕入店であるが、同時に紀州藩の金融面での御用も勤めている。長井、殿村、坂田、小津、長谷川といった松坂の有力商人で編成された松坂御為替組とともに、文政五年(一八二二)からは同藩発行の銀札製造から流通引替までその任に当たった。松坂店の店名前は越後屋則右衛門であるが、金融部門は三井組と称し、三井八郎右衛門、三井宗十郎、三井則右衛門の三名の名前となっている。このうち、三井宗十郎と則右衛門は三井十一家の

第2図 松坂町市街略図（安政三年）



注)「安政三年丙辰春（松坂町）全図」（『松坂市史第五巻』付図）より作成。

松坂南家（松坂家）則右衛門襲名表

初め即右衛門	初代	孝賢（融嘗宗珊了栄）	元禄5（1602）～宝永2（1705）
① 則右衛門	同	上	宝永3（1706）～宝永7（1710）
②	二代	高邁（物々斎宗三）	正徳2年（1712）以前～寛延3年（1750）6月
③	三代	高峙（功々斎宗恵）	寛延3年（1750）6月～安永元年（1772）2月
④	四代	高岳（乗々斎宗二）	安永元年（1772）2月～天明6年（1786）4月
⑤	五代	高行（蔭涼斎一株宗幹）	天明6年（1786）4月～天保2年（1831）11月
⑥	六代	高匡（桐糸斎宗韻）	天保2年（1831）11月～嘉永3年（1850）4月
⑦	七代	高敏（六師園秋瓦無咎）	嘉永3年（1850）4月～嘉永4年（1851）10月 安政3年（1856）正月～明治18年（1885）12月没

松坂北家（鳥居坂家）吉郎右衛門、宗十郎襲名表

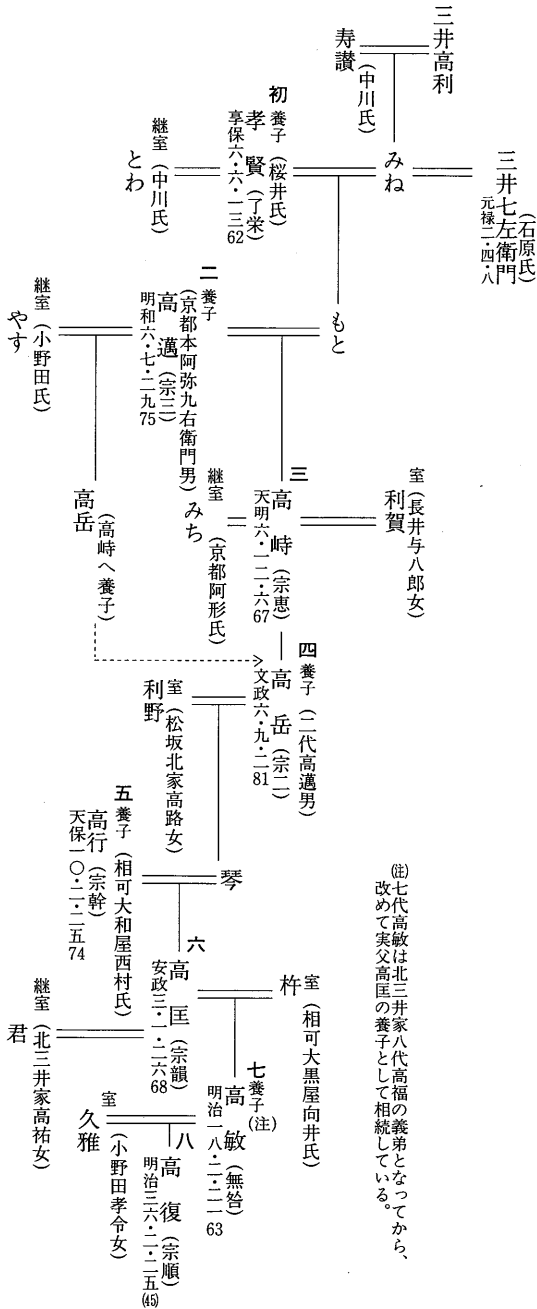
① 吉郎右衛門	初代	高古（忠筭一恕）	元禄元年（1688）～享保8年（1723）2月
②	二代	高豊（卓翁宗利）	享保8年（1723）～享保11年（1726）9月
③	三代	高路（達々斎玄通宗融）	寛延3年（1750）～明和2年（1765）7月義絶
① 宗十郎	四代	高蔭（藁蔭含宗養）	安永5年（1776）5月～天保3年（1832）8月
②	五代	高延（臨寛亭清操宗爾）	天保3年（1832）8月～天保8年（1837）11月
③	六代	高潔（桃華庵錦江宗雲）	天保8年（1837）11月～天保11年（1840）10月 天保12年（1841）3月～文久元年（1861）11月
④	七代	高猷（冷寛斎寂光宗猷）	文久元年（1861）11月～明治5年（1872）5月没

中で二軒だけ松坂に居住しており、代々大年寄を仰せ付かっている。二軒は松坂本町にあって、丁度松坂店を挟んだ形で（第1図参照、全体の町並は第2図参照）、店の南北にあるところから、松坂南家（松坂家、若松町家、現松阪家）、松坂北家（のち鳥居坂家、現永坂町家）の家名で呼ばれている。

松坂南家は、三井家初代高利の長女ちよ（再婚後みねと改名）に、高利の兄桜井弘重の四男孝賢を贅養子に迎えて初代則右衛門とした。元禄五年（一六九二）同苗一族は幕府から商売のためとして京都居住を認められて、公然と松坂を離れたが、則右衛門一軒を松坂の本宅に残した。則右衛門は一族の戸籍筆頭人として、紀州藩の御用に当ることとなった。以後松坂にはしばらくこの松坂南家一軒だけがあった。そして元禄八年（一六九五）頃に紀州藩から松坂町大年寄を命ぜられていた。この談話速記に登場する「六師園」こと三井高敏は七代目当主、七代目則右衛門である。

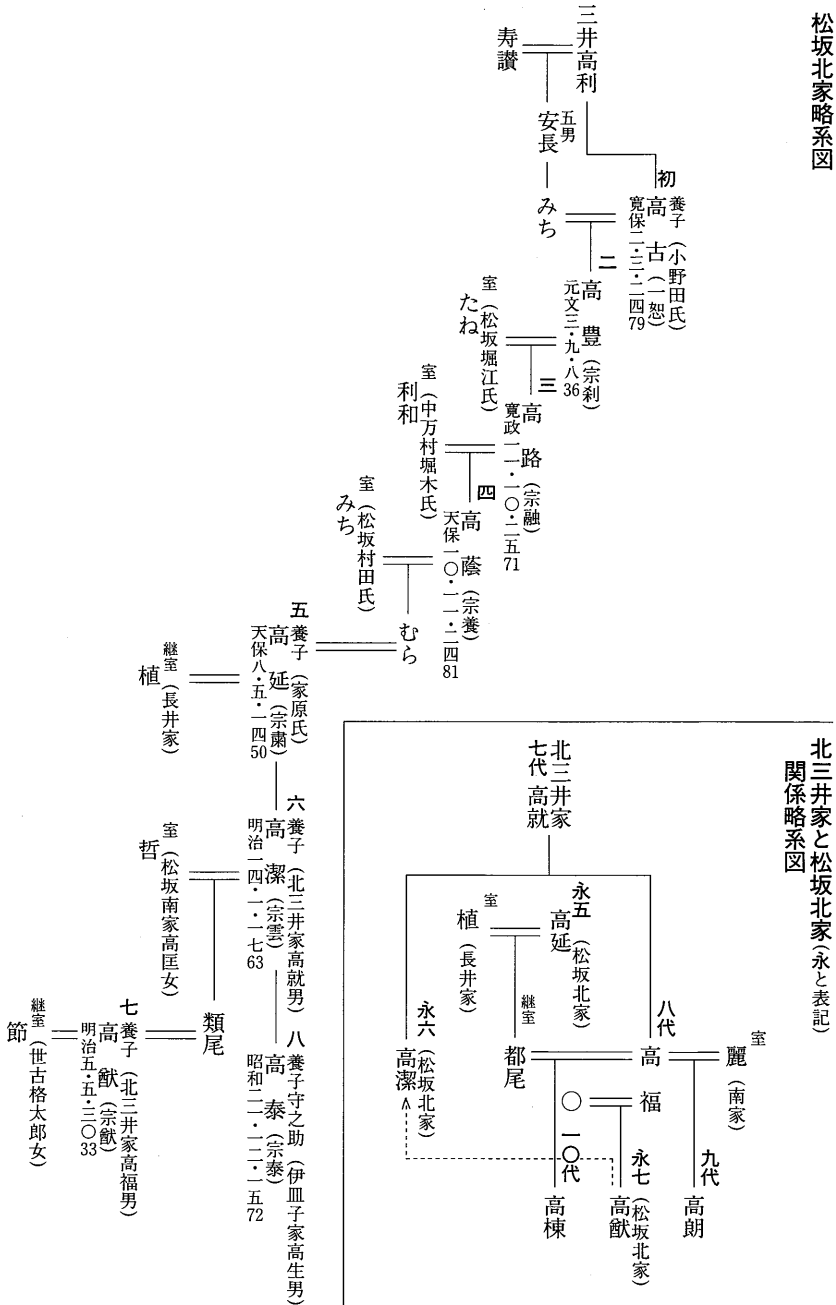
高敏は文政六年（一八二三）の生れで、天保一〇年一月、本家である北三井家高福の義弟という形式を踏んでから、改めて実父高匡の養子となっている。その翌年一八歳で大年寄見習、二一歳で日野町組大年寄本役になった。嘉永二年（一八四九）一二月に家督相続し、翌年四月、則右衛門名前を継承したが、父高匡時代の借財の後始末ができず、家事不整理の故をもって、大元方より京都に於て謹慎、本店での習学を

松坂南家略系図



(注) 七代高敏は北三井家八代高福の養弟となつてから、改めて実父高匡の養子として相続している。

松坂北家略系図



命ぜられた。その間は幼名の進蔵を名乗り、安政三年（一八五六）松坂に戻って則右衛門に復帰した。高敏は文化人で号を半知、後に戴星と称し、書道にも秀れていたため、明治元年（一八六八）三月より藩の松坂学習館筆道教授を勤めたが、その肩書は「大年寄銀札方御用意、年頭御目見之格」というものである。出勤時の帯刀も許されたが、京都大元方に遠慮して辞退した。さらに明治三年二月から四月にかけて藩校の一等助教として和歌山へ迎えられた。白塚喬太郎が伴をしたというのは、この時のことである。明治九年（一八七六）の三重県下の暴動によって、松坂両家も店も焼失したが、松坂南家は明治一三年に本町裏通の魚町に居宅を新築した。

またもう一方の松坂北家は、高利の義絶した五男安長の長女（つまり、高利の孫娘）みちに配した小野田権左衛門の三男、養子吉郎右衛門高古から始まった家である。高古は大坂勤務を終え、宝永六年（一七〇九）松坂に居住するようになって、正徳二年（一七二二）大年寄役を引き継ぐ。その吉郎右衛門高古から数えて六代目が篤次郎高潔、七代目が宗十郎高猷である。篤次郎高潔は、本家の北三井家第七代高就の六男で、同家八代高福の末弟であり、高猷は、その高福の二男であるから、本来は高潔と高猷とは叔父・甥の關係になる。宗十郎の名は四代高蔭の時から名乗りであって、高潔が三代目、高猷は四代目宗十郎となる。ややこしいので一三三ペ

ージの略系図と一一一ページの襲名表を参照されたい。

高潔は一七歳で見習、一九歳で魚町組の本役となり、次の七代高猷は二二歳で見習となり、二八歳で新町組の大年寄本役となった（因みに松坂の大年寄は全部で七組、七軒だが、この七軒のうち松坂南家と同北家の各三代目の寛延三年（二七五〇）から二軒とも同時に大年寄役に付くようになった）。

白塚喬太郎と同年で、親しかったという高猷は、高福の庶出で、天保十一年（一八四〇）京都に生れ幼少期に連家の長井家⁽⁸⁾に入ったが、嘉永五年（一八五二）一三歳の時、京本店元々中塚徳次郎の猶子となって、松坂店に初出勤している。

その後京都の北三井家に復帰して、安政六年（一八五九）二〇歳で改めて松坂北家に入家した。家督を相続したのは文久元年（一八六一）一二月で、養父高潔が紀州藩から武士の待遇を与えられ、平日帯刀の身分となったことに起因する。すなわち、士分の格になることは家則に反することとして、高潔が京都大元方から別宅隠居謹慎処分を受けたのである。松坂北家の当主名宗十郎は高猷が譲り受けたが、松坂町大年寄本役は高潔が篤二郎と名を替えてなお慶応三年（一八六七）四月まで勤めた。明治二年（一八六九）二月、紀州藩の藩制大改革によって、松坂に民政知局事が置かれ、大年寄七名に替わって四名の市長が任命された。そのうちの二名は則右衛

門高敏と宗十郎高猷であったが、明治四年七月には三名が廃止されて高猷一人のみになってしまった。その多忙さは「寔ニ御用多、終日御出勤、殊ニ寄候而ハ夜分御引取被遊、聊之御手抜も無御座、種々御心勞」と大元方宛番状に綴られる程であった。白塚はこの高猷を助けて書記となっていたが、高猷はその年一月より吐血を見、翌五年五月、肺病で死亡している。三三歳であった。養父高潔はその頃大元方取締役となつて横浜に滞在しており、白塚が三井に入るきっかけを作つた。高潔は又明治九年七月の三井銀行創立より、横浜分店元締として執務していたため、同年末の松阪での暴動では留守宅を焼失したものの居住に困ることはなかつた。土蔵二軒も焼残つたという。高潔は横浜を拠点として、明治一三年(一八八〇)五月、本家北三井家の養子守之助(実は伊皿子三井家第六代高生の三男高泰、当時六歳)を養子に迎えて松坂北家を繋いだ。

【松坂三井家と勤皇について】松坂は国学者本居宣長を産んだ地で有名である。松坂北家高潔の教育の師であつた祖父、四代高蔭(葦蔭屋)は若い時から文学に親しみ、学究の徒であつた。本居宣長の鈴門の一人であり、宣長の経済的パトロンであつた。その女婿五代高延は本居春庭の門弟である。また、松坂南家の高敏の父、六代高匡(桐糸斎)も本居大平、春庭の門人であつた。高敏自身も嘉永三年(一八五〇)本居内遠

に入門して国学を修めている。このように松坂での三井両家は、京都住居の同苗達とは文化的に異なる環境下にあり、幕末維新期において思想的影響は皆無といえないであろう。

松坂南家の高敏は、白塚の談話によると、幕末期は京都に出て、勤皇派浪士と親交を結び、特に紀州藩の勤皇の志士津田出や陸奥陽之助の兄とも交わつていて、家にも浪人が泊ることがあつたという⁽¹⁹⁾。松坂北家の高潔もまた松坂店のことより松坂役所と和歌山役所とのことに専心し、陸奥陽之助とは特に懇意の間柄である。また高猷の継室は、松坂町人で学者でもあり、安政大獄で連座となつた世古格太郎の娘(明治元年三月結婚、同四年四月離縁)である。両家とも松坂町大年寄と為替御用の立場上、紀州藩の役人との関わりから、勤皇の士の後援者となつていたようである。高潔の場合などそれが積極的な意志であつたか、付き合上止むなくそう⁽²⁰⁾なつたのかはわかりにくいところであるが、結果的に新政府に賭けた三井家にとってプラスに働いた(『三井事業史』本篇第二巻参照)。

【遠祖調査について】(其二)は予定外の三井の先祖の話となる訳だが、そのとつかりが白塚の、松坂店の格子と名古屋の伊藤次郎左衛門の松坂屋の格子が同じであることの疑問から始まつていて、聴き手の柴がそれに興味をそられる。遠い親類、各地の三井姓、地名の三井などから、調査上の問

題点まで話が展開していく。三井家編纂室が三上參次博士を

顧問に迎えて三井の遠祖の調査研究を進めて集めた史料は、

明治四二年九月に「稿本三井家史料 遠祖史料参考」として

まとめられた。ついで大正四年七月に同遠祖史料参考「追加

第一」が出された。それらの仕事の史料採集に最も力を注い

だのが柴謙太郎であった。三井家の先祖調査は、実は伊勢商

人考として重要な研究テーマとなっているのである。江州

佐々木氏の出かどうか、高利の祖父三井高安以前の遠祖につ

いてははずれも、これだという決めてのないまま、現在に至

っている訳であるが、難解な調査に取り組む柴の真摯な研究

姿勢が感じ取られる内容となっている。

それにしても、白塚の三井家遠祖に対する知識の豊富さと

関心の持ち方はなかなかのものである。これは、三井家先祖

の事蹟調査について一番強力な後援者であった白塚の主人、

新町三井家高辰の影響もあつたと思われる。

(1) 『松坂市史』第十一卷安政四年の「組頭動手扣」(十

二月)廿一日に「白塚方壺医師取締中帯刀御免申渡」

という記事があり、方壺という人物が白塚喬太郎の父

親のことではないかと思われる。

(2) 「等席人員調査 大元方」(三井文庫所蔵史料 本五

二七)。なお明治七年の横浜三井組のトップは六等席、

末席は十三等である。

(3) 「三井銀行役員名簿」(三井文庫所蔵史料 銀行二―

二―一三)。

(4) 「三井一統松坂人別帳」(三井高蔭抄写本写) (三井

文庫所蔵史料 特二三)。元禄六年から則右衛門が筆

頭者となっている。但し、明和三年以降は書き写すさ

いの手間を省いたのか、則右衛門一家は記載されてお

らず、また安永四年以降は吉郎右衛門一家も省略され

て、松坂在住以外の一族のみの記載がある。

(5) 北三井家第八代高福が、一三代目八郎右衛門となつ

た前年の天保七年(一八三六)は、宗竺居士の百回忌

に当る。同苗間の積年の確執も治まり(安永持分けよ

り文政一件まで。詳しくは『三井事業史』本篇一参

照)、三井の体制を「宗竺遺書」の兄弟一致の原則に

引き戻すねらいが高福にあったものと思われる。南三

井家から小石川三井家に入った七代高喜も天保一二年

に高福の義弟となっているし、高敏の三男賢三郎が、

新町家に入家する際も直前に北家高朗の養子とした。

(6) 松坂町大年寄の勤務について、文久二年(一八六

二)から明治二年(一八六九)に至る前後八年を松坂

南家高敏の身近に仕えたという久留伊蔵の談話が「稿

本三井家史料 松坂家第七代三井高敏」に載っている

ので紹介しておく。

○當時六師園様ハ、累代ノ職掌タル松坂大年寄役ヲ勤メテ居ラレタ、一体伊勢紀州領ニ於テハ、上ニ松坂城代ガアツテ、松坂・田丸・白子、各々六万石、併セテ十八万石ノ領地ヲ統轄シテ居ル、而シテ松坂町ニハ町奉行ガアリ、其下ニ与力ガアリ、大年寄・町年寄等ガ順次其下ニ属シテ居ル、ソコデ六師園様ハ、毎日町會所ニ出勤シ、隔日ニ町奉行所ニモ出頭シ、概ネ一時間位デ公務ヲ果シ、再ビ町會所ニ立寄ツテ、暫クシテ帰宅スルヲ例トシタ、毎日十一時頃出勤シテ、三四時頃退出サレル、私ハ常ニ鞆ヲ持ツテ随從シタ、(中略)

○毎年三月八日ニハ宗判ト云フ事ガアル、八歳以上ノ者ヲ集メテ町年寄ガ切支丹ニナラザル事ヲ訓戒シ、夫カラ其証トシテ竹テ判ヲ押ス、職掌上之ニモ立合ハレタガ、船江ノ出郷デハ宗判済ノ後、生蕎麦ノ振舞ガアツタガ、夫ヲ大変喜ンデ居ラレタ、

○夫カラ時々、角力ガアツタガ、矢張立合ハナケレバナラナイノデ、之ニハ余程迷惑シテ居ラレタ、夫デ其詰所ヘ往ツテモ、烟草一服シテ直ニ帰ラレル、家ノ内ニ番附ナドガ落チテ居ルト、直ニ焼イテ了ハレ

右のうち勤務時間については、同稿本の「節女談話」

(節女は松坂北家高潔の使用人)に、

一、大年寄ハ、毎日役所ニ出勤シタリ、弁当持参ニ

テ、午前八時頃出頭、午後四時頃退出スルヲ常ト

セリ、

とある。

(7) 松坂北家は初代から三代までは吉郎右衛門を名乗っている。三代目吉郎右衛門の高路は不身持を理由に、同苗一族から義絶され、家督を一一歳の二男高義に譲ったが、その高義は、三年後の明和六年(一七六九)に家督を弟の高蔭に譲って、同じ連家の長井家に養子に入った。したがって高蔭は本来なら松坂北家第五代の筈であるが、高義が長井家を相続したため三井家では四代目としている。

(8) 嘉永二年(一八四九)七月、大元方の財政緊縮政策のため三井五連家のうち長井家と家原家が、同族組織から切り離された。高猷の養父長井伝蔵が大借財を作ったことを理由に、北家が高猷を引き取った。

(9) 「松坂書状之留」(三井文庫所蔵史料 別四二一九)。

(10) 左は高敏に仕えていた久留伊蔵の証言である(稿本三井家史料)松坂家第七代三井高敏。

○(高敏は)勤王思想にも富むで居られて、明治初年

内務権大丞になった世古格太郎と意気相投じて、深く交際して居つたが、世古が不幸にして幕府の爲に捕はれて、唐丸籠にて江戸に護送せらるゝや、世古の身を慮つて往復の書類などは悉く焼捨て、了はれた、又卒去になる二三年前に、三條公から三明書樓と揮毫した額を戴いたが、これもつまりは当時より勤王の方に傾いて居つたのが縁となつたのであらうと思ふ、

○藤堂伯の祖父や、津田出などとは親密の間柄であつた、

○御体格は大きく、鼻すち通つて、なかなかの美男子でした、擊劍が大すきで、邸内に道場を設けてやられて居つた、刀剣などもだいぶ所持されたが、廢刀令が出てからは不用に歸し、九年の暴動の際に焼失して了つた、

(10) 維新の頃、陸奥陽之助が頻りに勧めて、一緒に役に就こうと高潔を誘つたが、已に三十年間も紀州家御用を勤め、なおこの上はコリゴリ、と断つたという話が永坂町家に伝わっている。

(11) 元松坂店勤仕者井田一平の談話を左に掲げる。
店ハ表面一体ニ四角形の嚴めしき大格子にて立ており、軒ニは長さ二尺ばかりの印ある紺暖簾を掲之、

格子は若いもの、この間を潜り出て、夜遊びニ出掛けし程のものなれば頗る粗らきものと知るべし

(樋口知子)

凡例

一、漢字は原則として通用の字体を用いた。

一、変体仮名は現行の仮名に改めた。

一、句読点の。、は原文通りである。

一、抹消箇所および訂正箇所は原則として一々断らずに、訂正された形で入れた。

一、朱書ならびに朱傍書は、行間に(朱書(朱傍書)と断り

(一)に入れた。欄外朱書は、行間に(欄外朱書)と断り、

当該箇所の下に※を付して、(一)に入れた。なお欄外朱書中に高潔史料とあるのは、「稿本三井家史料」の

「鳥居坂家第六代三井高潔」を指す。

一、○の中の・や傍点・は朱筆である。

一、行間の(一)のみ紹介者の注である。

白塚喬太郎氏談話速記（第一回）

明治四十四年七月十八日於新町家

○柴 速記に取りましますのは今日が始めてございませうから、私
は一遍伺つて覚えて居りますけれども、松坂でどうなさつ
て、和歌山へ行つてどうなさつたといふ一筋道をもう一遍
伺ひまして、それから枝葉に分れて伺ひますれば、私の方
も今日は此位の事を伺ふといふ積で参ります、あなたの方
でも、此次は是だけ話すと仰しやつて下されば、其を持つ
て来て伺ふといふ事になりまして、大変都合が好からうと
思ひます。

○白塚 それは貴所の方の御都合で、私の方はどうでも一向
差支ない。

○柴 長谷川氏も初めてございませうから、先に一筋道をずつ
と伺つて置きますと、是から写しますのに都合が宜からう
と思ひます。越後からどうで、藤屋はどう、山川ホテルは
どうといふ御話を、半分から書いて貰ひますと、写すには
写しますけれども、伺つて頭に覚えて置く方が、将来室の

仕事に都合が好い、只筆記して戴くばかりの仕事ぢやあり
ませぬで、矢張彼処へ行つて話が出た、どうだ斯うだと云
ふことを覚えて置いて貰はなければなりませんから……

○白塚君 それは又何処やらで役に立つて来ることがある、
どうしても耳に入れて置かぬと大変な違です、先達の話に
斯う云ふ事も有つたが、是は此処の何になるとか、いろ
く何もございませうし、それは御尤です。

○柴 それでは御面倒でございませうけれども、三四度も御邪
魔する積りでございませうから……

○白塚 それは私の方で願ひたいものです、三四度も願はぬ
と、なか／＼一度で悉すといふことは出来ませぬから――
それに時日が、あの時分とは一年遅いとか早いとか云ふや
うな場合もあらうと思ひますから、其処はどうぞ悪からず
……

○柴 其代り私の方からも、いろ／＼物を持つて来て伺ふつ
もりでございませう。

○白塚 さうすると尚更結構でございませう。

○柴 兎に角まだ伺ひませんでしたが、一体あなたは御国は
何処ですか、伊勢は分つて居りますが……

○白塚 私は勢州松坂ぢや。

○柴 白塚村の方ではないのですか。

○白塚 北畠の何の折に、三井影重の彼辺を皆焼かれた。其

際に、ちきに影重の次が白塚村なのです、それで白塚村から焼出されて松坂へ飛出して来たのです。

○柴 さうですか、それで松坂住といふ訳なんですナ。

○白塚 それで松坂住なのです。

○柴 さうすると、ズツと松坂に居らつしやりましたのですか。

○白塚 エ、彼方に宅もありましたし。

○柴 松坂は何処でございます、町は。

○白塚 町は日野町です、暴徒以来、今は同苗が残つて居りますけれども、魚町といふ処へ転宅して、其魚町に私は住居して居ました。

○柴 さうすると長谷川さんの御近辺ですか。

○白塚 あの上の方になつて居ります。

○柴 それから御役人にお成りになる迄は御武家だつたのですか。

○白塚 あれは松坂といふ地方が御承知の通り紀州領で、松坂六万石ある。新宮が六万石、松坂六万石、田丸が六万石と、十八万石伊勢にある、其内の六万石といふものを松坂町で持つて居つた。それが又あの地方の面白いことには、松坂町に大年寄といふものがある、其大年寄の支配なんぢや、大体松坂町の事は――。其くせ町奉行があり、郡奉行があり、御目付があり、城代がある、斯う云ふ者が紀州か

ら出張して勤めて居らる、けれども、大体市中の市民の事に付ては大年寄が皆扱ふ、斯う云ふことになつて居る。つまり大年寄といふものは、松坂町の殿様だつた。それで私は元と医者の子なんだけれども、少し道楽したもので、自然何でありましたけれども、已を得ず私が矢張り相続者にならにやならぬやうな事になつて、相続をして居りますけれども、其頃遊んで居るものに依つて、恰度三井家は近所ではあるなり、親共は始終出入して居るし、私共親はサシヤク医師取締を吩咐つて居つたものでございますで、子供の時分に始終何がなしに御宅へは毎日のやうに遊びに行つて居つた。松坂さんの鳥居坂さんの、両方へ遊びに行つて居つた。其うちに松坂さんの方は、京都へ出て多く御留守でしたが、鳥居坂さんの方は篤次郎さんと申上げた、あれが松坂に始終居られて、是が大年寄ぢや、彼の銀札に御承知の通り三井八郎右衛門、三井則右衛門、三井宗十郎といふ名前がある。さう云ふ格式があるものに依つて、大年寄といふものも非常な勢力があつた。私共始終遊びに行つて居るものに依つて、十五六になつてから、大年寄の書記を私がして居ましたのぢや。

○柴 さうですか、さうすると篤次郎さん附といふのぢやないのですか。

○白塚 さうぢやないのです、大年寄といふ者が恰度七人あ

る、それで七町内に分れて居つて、皆持ち／＼があつた。松坂を七つに割つて、一人々々皆受持になつて居つたものです。

○柴 大年寄は、御為替とは違ふのですか。

○白塚 違ふのです。

○柴 七つありましたか。

○白塚 エ、。此札の方は今の御為替の方ぢや。

○柴 私はずよつと今見たけれども、違つて居りました。

○白塚 それも田舎の事です。依つて氣儘働ぢや。併し総て正月など、届が出ますのも、皆大年寄の受持です。依つて、どうしても大年寄の手を経なければならぬ。大年寄の手を経るに付ては、座帳に皆控へて行かなければならぬ、テ書記が三人程ありました、其の一部分を私が幼少の時分やつて居りました。

○柴 それは大年寄の会所へ行つて御遣りですか。

○白塚 さうです。

○柴 さうすると今の役場の処ですネ。

○白塚 さうです、其処へ毎日弁当を持つて出勤するのです。出勤して用が無ければ早く退きますけれども、昼過迄は詰切つて居つたものです。それから御一新になつて、廢藩後府県知事といふものになつた。それで薩張りそれを引繰返してしまふて、改めて其時民政局といふものを紀州から置

かれて、参事に大属、中属、少属、皆置いて、元の奉行所の跡へさう云ふ役所が出来た。さうしたら其折に鳥居坂さんの御先代の宗十郎さんと言つた方、木屋町様の弟御様、これが一人になつて前の七人といふ者は廢してしまつた。

此方一人にならしたつたに就ては、書記もさつぱり廢されてしまつて、改めて権少属の次に見習があつたです。それで町の事は旦那の事です。依つて——随分あの旦那もそんな事は好きな方ですし、お少い時分（つひ）から算盤の友達で、私と同年でした、別段に御懇意にして居たものです。依つて、私一人では困る。是非出てくれと云ふこと。それから民政局へ届けて、やはり私は始終書記で出て居りました。それが又廢止になつて三重県となつて来たです。三重県となつてしまつて、今度はさつぱり無くなつてしまつた。それで私もあとの残務を取調べて置くが宜からうと思つて、残務の調をして居つた。さうした所が三重県の出張所が山田にありまして、それから今度は区長心得といふものを命ぜられた。どうも困る、もう止める積りだつた所が、是非やれとペタリとやつて来た。テ困りますかと云つた所が、困つても何でも市中の事を知つとる者が無いとどうも成らぬ、是非勤めいと云ふ。それから仕方がない、それなら当分やりませうけれども、とても私共御免蒙りたい。マア兎も角もと云ふことで、区長心得といふ名前を拜命して、半年余

りやつて居りました。恰度宗十郎さんが歿くなられまして、私も七月の十五日から瘧を病つて——日取りといふ瘧を病つて、体も疲労しますし、到底こんな事をやつて居つたつて、又何時廃されるやら知れもせぬものに引掛つて居つてもどうも成らぬ、此辺が思ひ切り場所ぢやと思ふて、病氣を幸に辞職してしまつた。それに随分厄介な事が有つたのです、こいつ困ると思つたものですから、後へ二人残して置いて、私は一番先に辞職してしまつた。其の時分、鳥居坂の旦那が横濱に御詰になつて居つた、それで予て私出る積りだといふ御約束をして置いた、さうして癒るなり直に退きました。さうすると其頃横濱四日市間の航海がありました、それをもう一箇処鳥羽に航海所を拵へて、松坂から山手の荷物を皆、堀割を松坂に拵へて鳥羽へ遣つて、鳥羽から送らうと云ふ計画を、兩三名発起者が出て来まして、恰度幸だから其れに入つて、到底出願せんならぬと云ひ居る所へ篤次郎さんが御出になつて、其折に私は直ぐに行くに依つて、又東京の方へ行つたら都合して上げやうと云ふ御約束で、それから協議の末、東京へ開港を出願に来んならぬ、それに付て東京へ来た人が無いのだ、さうでせう其時分は——。それから三重県の大属、出張所の途中の人でした、名前は失念しましたが、此人が来る其外に松坂から三人、山田から二人、鳥羽から一人、川崎から一人、七人

の出願人が出る、其出願人の中に加つて是非行つて貰ひたい、東京は何方向いても分らぬ者ばかり行くのだから、是非行つて貰ひたいと云ふ。大属もそれは誠に都合が好いと云ふことで、それから私が案内ぢや。デそれなら四日市まで行つて、四日市から船に乗るといふ積で、恰度七月に私は悪くて、九月十五日に松坂を立つた。それで皆連れて四日市に来て、四日市に泊つて、是から船に乗つて一晩、寝て居るうちにもう横濱になつてしまふ、さうすると私も横濱にちよつと上りたいで、幸だから是非さうしやうと言つた所が、船に乗人がない、蒸汽といふものはツイ乗つたことが無いで、怖いとか暈ふとか云つて誰も乗らぬ。イヤ寝て居りさへすれば宜いのぢや、怖いと思つたところが一晩ぢやと云ふけれども、どうぞ止めて貰ひたい、陸地を行きたいと、どうしても八人と一人で仕方が無い。それなら仕方が無い陸地を行かうと云つて、とう／＼陸地を出まして、伝馬町の裏通の伊勢町河岸でした、其処に宿を取つて、それから三重県の出張所があります、今の印刷局が松平越前守の屋敷、伊勢の桑名の殿様（欄外本意）「伊勢桑名ノ殿様」ハ「越前福井ノ殿様」ノ誤リナルベシ、彼処が各県の出張所で、玄関がずつと両側に設けてあつて、何県々々と札が貼つてありました、彼処へ各県から皆来て居つたものです。それで彼処で弁当を食つて、三重県の出張所に行つて、漸く許可に

なりました。テ許可を得たに付て帰るといふことで、私は横濱へちよつと寄りまして、其話をして、漸く許可になりましたと云ふと、帰るかどうするか。折角来たものだから、帰るならば私は此方で充分見物して行きたいと思ひます。それなら幸ひだで、俺の処に居つて飛歩いたら何うだ。それなら尚更結構だ、それでは皆還して私だけ残りませう。それから仲間の方に其話をして、私は此処が済んでさへしまへば他に用は無い、情願委員は是で御免を蒙る。それならさうするが宜からうと云ふので、私は東京で断つて、皆帰らせまして、それから横濱に滞在して居つた。さうした所が其時分銀行の方に、永緒太郎右衛門でしたか、是が主任をして居つて、恰度此頃は租税の取立て手が要る折だで、給金を上げますに依て手伝ふて貰ひたいと云ふ。それは一向構ひませぬ、尚更結構だ、やりませう。それから銀行へ毎日手伝に行きました。それが銀行への縁の初りで、さうした所が種々用があるし、其頃は御承知の通に汽車が無いものですに依て、旦那方が御出になるに皆船です、其船へ送り迎に、横濱の店に誰も行き人が無いのです、嫌がつて――、それで恰度幸ひだで、それを引受けて貰ひたいかと云ふやうな話、それは皆知つとる人ばかりの事だで一向構ひはぬ。それなら是非さうして貰ひたいと云ふ。それから先づ船の送り迎ですナ、イヤ室町さんが見えた、今度は高生

さんが御出になるとか、八郎右衛門（八代高橋）さんが御出になるとか云ふやうな騒で、とつくり其方に追流されましてナ、何時迄雇に居つたところが何うも成らぬで、銀行員にしてしまはうぢやないか。それはどつち道構はぬ。それなら更に銀行員にしやうと云ふことで、遂に銀行員になつたのでした。さうした所が、其時分は又今とは違ふて、銀行に盗賊が入る、詐欺を為られる、いろ／＼ゴテ／＼ございました。そんな事が皆松坂で市政の方に掛つて居つたものですから、恰度うまいで其方を担当して貰ひたいと云ふ事で、始終そんな事にばかり関係して、探訪して歩いたり何かやりました。其時分に銀行から、賞与として式拾円と云ふやうな書付を貰ふた事が二三度ありました。随分中には面白い探偵もございましたが、さう云ふやうな事で、さつぱり動くことが出来なくなりました、ずつと横濱に在勤して居ました。其中に篤次郎様もあの通り御死去になり、予て松坂にお居での時分から、俺が死んだら貴様に世話して貰はにやならぬと約束して居つた位のこと、幸ひ御世話も出来たのでした。それで十七年にあの銀行を新築した、是も私共、今のやうに技師は無いなり、私も好きだつたものですに依て、設計を立てて図を引いて見せて、さうしてあれは拵へたのです。石などは皆私が伊豆に行つて、自分で研つて来たのです。残らず石造にする積りで初め掛つた、それで伊豆へ

行つて熱海に泊つて居まして、門の柱は河津にしやうとか、何処の石はどう云ふやうにしてとか、毎日々々昼は石祈り、さうして小田原から此方へ送つたのです。それで十七年に落成して、十九年に又銀行の模様が変わつて、横須賀が二等分店になりますので、恰度其頃横浜で当座を始めた、テ横須賀の方も当座を勧め旁々で行つて貰ひたいと云ふ、それから十九年の歳、横須賀へ当座を調べに私は行つたのです。それから二十年に神戸の取締が歿くなつたので、名古屋の笠木といふ男が神戸に廻るに就いて、其跡へ行つて呉れといふことで、俄に又名古屋に出張して、名古屋に三年程居りました。いろ／＼な事に出会はずもので、名古屋では明日立つといふ朝、店員が殺されてナ——金は持つて行くし店員は殺されるし、サアそれで出立することが出来ませぬで、其年夏、単衣で出掛ける積であつたのがなか／＼出られぬで、とう／＼荷物を解いて復た袷や綿入を出すやうな事でしたが、是も裁判を終つて、其一件を済して置いて私は神戸へ行つたことでした。テ二年程居つて神戸を済して、大坂へ来て、上柳が東京に来るに付て、其跡の貸付は私が扱つて居りました。もうさうなつて来ると年はとつて来ますし、迎も是はかなはぬと思つて、東京へ来てから段々かなひませぬと云つて——恰度此方ハ又追々老人の廃止の際で、一番年嵩と来て居るものに依て、私

共暇になつたのでした。尤も大阪から来る時に、直ぐに国へ帰る積りで、家内も何も皆国へ遣つて、自分独身で、靴一つで此方へ来て、宿屋に滞在して居つたのでした。さうした所が高辰さんが、何分人を滅して家を改革したいで、堪へられるなら此方へ来て貰ひたいがと云ふ。他様なら御断りだが、あなたの方なら子供の時分から永々の縁故があるのだから、それは一向構ひませぬと云つて、それから新町さんの方へ戻つて来た。それで御承知の通り一洗するに付て又彼方が京都に行つた奉公人の処分は旦那では出来悪うございます、それで皆帰つて貰ひまして、小口から暇を遣らなければならぬ、さう云ふ事は誰も嫌がつて為ないものだから、えらい壺を被つて其をして、暫く此方に留守居して居るうちに、又復び御出になる事になりましたから、此方の地所を始めて買つて、遂に此処を求めた事でした。其うちに松坂の方は、家内等を国へ帰して、荷物が着くなり、三十日間経たぬうちに全焼に遭つて、着のみ着のまゝとなつてしまつた、どうも弱りました。それだもので仕方がない、御断りして国へ歸つて、国の処分をして来なければならぬ。所が大火の事ですに依つて、親戚も何も皆焼けてしまつたものですから、大きに困りました。それから何うも成らぬ、彼方に居ればかなはぬ、もう止めぢやと云ふので、家内も倅も皆此方へ連れて来まして、その爾来此方

に居着いて居るのです。

○柴 随分長い間でございましたな。

○白塚 随分長い間でございます、いろ／＼な事がそれはありました。

○柴 それで松坂の事と市政の事ですな、それから銀札の事と、御宅々の篤次郎さんなり則右衛門さんなり宗十郎さんなりの御話を、是非共一つ伺つて行かぬと困ります。それから横浜の店の工合、彼処は鳥居坂さんが一生懸命やつて置かれた所ですから、伺つて置きませぬと伺ひ甲斐もありません。それから店の建築とか、横浜、神戸、名古屋あたりの店の御話も、漏なく伺ひたい積りでございます。

○白塚 私の記憶して居るだけはいろ／＼御話しませうが……

○柴 此筆記も、私の方には誰にも御覧に入れないうことになつて居ります、旦那方にも特別に御命令が無ければ御覧に入れないうことにしてある。それでございますから、どれだけ御話し下さつても、実は御迷惑のか、らぬ事にしてあります。どうせ御話を伺ひますに付ては、いろ／＼出て来るに違ひありませんから、何でも秘密蔵としてすつかり入れてあります。それで一通り出来ましたならば、私の室に残して置くのが一つ、一つは差上げますから、御暇の節御覧になりまして、是が訝しいとか、いろ／＼御思ひ付にもな

りませうし、もう少し話して遣らうと云ふ御考が出るだらうと思ひます。

○白塚 それは無論ありません、種々の事がありますに依つて、順序は逐つて御話して行く積りでも、其間に又ちよつと御話して置きたいと云ふやうな事が出て来るです、あの折に斯う云ふ事があつたとか、何う云ふ事があつたとか——。それでホンの概略でございますが、概略申上げた所です、それから細かいちよい／＼した枝葉があらうと云ふものです、其等は直にお話を致します、又私も失念して居ることがありますし……

○柴 間から又私が伺つて、折角お話をなさる積りの処を、横から引張つて岐路に入ることもあらうと思ひます。今日は銀札を少し持つて来ました、全部集めて見たいと思ひまして集めましたけれども、どうも皆集まりませぬ。是は松坂だけの分でございますが、二種類あります。

○白塚 (標品供覧) これが三井組といふのと為替組といふのが有る、此為替組といふやつが銀札会所で扱ふのです。総て銀札会所の方で扱ひますけれども、三井組とそれから為替組といふのがある、其為替組といふのは何うぢやと云ふと、紀州の為替方を拜命して居られる人が又別にありまして、それが為替組なのです。其為替組といふのは、私も覚えて居る、前から勤めて居られました彼の小津清左衛門、

長谷川次郎兵衛、長井嘉左衛門、これが為替方で……

○柴 三人でございましたか。

○白塚 三人。

○柴 殿村などは後から入つたのですか。

○白塚 あれは其前です、殿村佐五平、これは随分旧家でありました。それであの頃は、嘉永天保からですに依つて、其後為替組に入られた人は、其外にありはしませぬけれども、殿村ともう一人……

○柴 坂田五郎兵衛ちやありませんか。

○白塚 是は後でございます、此に大方出て居りませう（銀札署名者を指す）殿村佐五平、小津清左衛門、長谷川次郎兵衛、長井嘉左衛門、是は元の為替方なのです。坂田といふのは早く歿くなりました、私共と同年の息子が一人居られたですけれども、それは為替方の名前ばかりで、もう弘化嘉永といふ時分には、實際勤めては居られませぬんだ。それから此殿村佐五平といふ人も、古い家柄であつたもので、ずつと昔此為替方の出来た時分に拜命せられた時には為替方でありましたけれども、其後は為替方といふ名ばかりで、もう実際の方には関係がございませぬ、追々微禄でございました。此殿村佐五平といふ人は、大年寄を勤めて居られました。テ中古以後は唯為替方の格式があるだけで、勤めて居らるゝのは此三人。それから坂田が退かれまして

から竹内嘉左衛門といふ人が入つた、文久安政以後竹内嘉左衛門といふ人が為替方になられまして、これは出勤して居られました。それで此札の出来る時分には、是だけの名前であつたものです、同じ為替方で出勤はして、同じやうにして居られましたけれども、此札には入つて居ないです。此札に入つて居るのは、ずつと古い所の人ばかりです。○柴 是は三井組なら三井組の中で拵えて、会所へ持つて行つて引換へたものですか。

○白塚 さうぢやない、拵へるのは皆銀札会所で拵へる。交互に職工が入りまして、此職工が三井組の御出入の職工が入る、又小津清左衛門の手から入つて居る職人がある、其等は皆為替方の職工としてある。それで始終人が変わりました、あれは三井組の職工ぢやとか、為替方の職工ぢやとか云ふて居りました、つまり銀行の職工なんぢや、只名前だけが斯う云ふ名前になつて居りました。テ其爾來は名前のあるのは余計ありません、唯銀札会所で之を出すやうになつた、初は両組と云つて、三井組と為替組と二つになつて居つた。それから今の見習とか何とか云ふ、いろ／＼人が入つて来たものですに依つて、もう名前を出さずに、専ら銀札会所といふものにして之を刷つたのです、銀札会所といふのが其時代には多く、御名前の方のは余り刷りませぬ。テ古い所のは残つて居りますけれども、新しいのには皆銀

札会所ばかり。

○柴 それですナ、随分捜して見ても無いのです。

（欄外未書 遠藤佐々忠）
〔※速日 高潔史料二三井組名前前三名ノ銀札写真ヲ収ム（高潔史料安政六年六月条参照）〕

○白塚 無い筈なんです。初は又さうでないと、人民が信用しないものですに依つて、名前を現はしてやつたのですけれども、もう人も十分信用して、銀札会所に引換に行けば、何時でも金になると云ふことが分つたものですから、其時代は此銀札会所といふ方の物ばかり出した。けれども銀札会所へ行つて銀札を取扱ふ者は、やはり為替方と三井組と両組から出て、日々此の扱をしたものです。

○柴 一緒に行つたのですか、今日は三井組、今日は為替組といふのぢやございませぬか。

○白塚 さうではない、出ては居ますけれども当番はありまして、今日は長井嘉左衛門の当番だと云ふと、小津清左衛門から長井嘉左衛門へ引渡して置く、毎月替り合ふのです。ア彼処迄は皆毎日出て居ますけれども、其時分の金庫ぢやナ、或は大切な書類といふものは、長持に入れて毎月順番に廻つたものです。

○柴 長持の大きなのを担いで夕方に帰つたと云ふのは、其れなんですネ。

○白塚 其れなんです。尤も其当番といふものは、役所から

の文通があるものですから、其等の扱から、事故があれば皆其当番で扱ふことになつて居つた、其の為に当番といふものが拵へてありました。其当番は月々順番でした。

○柴 さうすると毎日金を、正金幾らくで持つて行くのですか。

○白塚 金は其時代さう余計は要りませぬけれども、それでも千両箱で皆持運びするものですから、正金は持つて歩かれませんに依て、通ふのは多く書類だけらしいやうです。それで土蔵に藏つてあつて、当番が行つて開けると云ふやうになつて居つた。

○柴 銀札会所といふのは、今の山川ホテルの処ですネ。

○白塚 エ、山川ホテル、あれが銀札会所の跡です。

○柴 それでは御役所からでも近うございますネ、町役所はあの突当りの裏の処、それから御宅は横町ですし、長谷川さんは裏ですし、小津さんも横の処、皆集つて居りますネ。

○白塚 あれで長井が少し離れて居つた。

○柴 何処でございますか。

○白塚 これは港町といふ処。

○柴 さうすると此札を持つて行つて、其処で一匁なら一匁で換へて貰ふ。けれども信用が出来て居りますから、あまり引換は来ますまい。

○白塚 引換はあまり来ませぬ、引換に来るのは諸商人や遠

国の、例へば大阪から来るとか、江州から来るとか、それが皆集めて——集めるのは札で集める、それで銀札会所に持つて行つて、何千円なり何百円なりと彼処で取換へて、正金を持つて歸つたものです。

○柴 引換の手数料は取りませぬか、一匁持つて行けば、一匁貰ふ訳ですか。

○白塚 さうです。

○柴 さうすると御為替組でも三井組でも、そこは損といふやうなものですナ、手数料を取らぬから……

○白塚 ハア。

○柴 其代り初に三井組なり御為替組なりから札を出してしまふから、其時の利益で済む訳ですナ。

○白塚 さうです。

○柴 私には分りませぬが、十枚でも二十枚でも、バラで持つて行きましたか、括りでもしましたか。

○白塚 あの地方では六十四枚を以て壱両としたのです、他では銀六十匁としたのですけれども、松坂の方では六十四匁を以て壱両とした。それで之を十六枚持つて行つて換へて呉れと云ふと、二朱金二つ呉れる、或は一分銀一つ呉れると云ふやうに換へて呉れる。それで彼方では之を六十四枚づゝ、一把にしてある。

○柴 其一把にするのに、他にはよく孔を明けて通してある

のがある、

○白塚 是には孔は明いて居なかつたです。

○柴 是はどう云ふやうにして束ねてございましたらう。

○白塚 私共横浜に来て大きに誇つたことがございましたが、横浜で民部省或は大蔵省の札を数へるに、東京の人は平素金と錢とだものですから、一々、一枚二枚と斯うやつて数えて居る、なか／＼百円も二百円も数えるには大変だ。私共は又始終これで生れて来たもんだで、チヨツチヨツチヨツとやるのが得手なんだ。そこで横浜へ来て銀行に直に投り込まれたやうな事でしたが、それは私共手掛けて居るで、札なら一向平気ですけれども、金の方だと面倒だと云ふ側なのでした。

○柴 成程あなたの御話の通り、どうも之を勘定するに、バラ／＼とやつて勘定したらしいです、何故なれば上が皆ほろけて居る。真中が折れて居りますナ。

○白塚 斯うやつて数えるです。(形容にて示さる)

○柴 是はやはり紙で結えてあるですか。

○白塚 中央をからげぬで、少し下をからげます。切つて仕舞へばそれ迄ですけれども、少し手掛けた人は切らずに此儘でチヨツチヨツチヨツと勘定して居ります、六十四枚あれば壱両だ。さうするともう別に何せんで、一兩二兩三兩と行けるものですから、大概さうして居りました。バラに

したら大変ですから……

○柴 それは今日のやうに括つて、何処かの印なら印を押して、其儘通用はしませんかつたか、やはり一枚々々勘定したのですか。

○白塚 皆勘定した。

○柴 三井組なり御為替組なりで包んで、次郎右衛門包のやうにして出しても通りませんかつたか。

○白塚 それはどうしても皆数えませぬと……

○柴 此にもございますが、よく丸上と書いて刻印が捺したりなどしてある、これは扱つた時の印でございますか。

○白塚 其家でやるのでございます。

○柴 丸信と書いたり種々になつて居りますが……

○白塚 さうです。

○柴 よく併し是で贋造が無かつたものですナ。

○白塚 有つたのですワ、大有りです。それで是は贋造する斬と断罪といふ刑で、私共覚えて居ります中でも、何人首斬られたか知れませぬ。

○柴 出来易いのですからナ。

○白塚 今考へると、子供でもこんな事をするのは何でもないやうなものです哩。それから此発行が、桑名まではずん／＼通用したのです。

○柴 桑名まで行きましたか。此方は山田迄ですか。

○白塚 此方は山田鳥羽、動もすれば新宮あたりまで持つて行つた、又歸つて来れば直に金になるものですから、通用したのです。デ此れが出来た後に、津の藤堂公でも之を拵へた、藤堂公にも札はありました。併し何方が受が宜いかと云ふと、松坂の方が受が宜かつた。

○柴 やはりそれは御為替組三井組がしつかりして居るといふ為でせうか。

○白塚 マア其辺の為だらうと思ひます。

○柴 どうも他の札は綺麗でございますナ、あまり使はれなかつたものと思つて居ります、松坂のだけは何処で見ても皆汚れて居ります。

○白塚 皆汚れて居る、それは新しいのはございませぬワ。それから篤次郎さんが紀州に招かれて、御一新前ですが、紀州では五個国通用といふ札を拵えた。

○柴 よく玉津島の絵を描いたりしたものでせう。

○白塚 それは何処で発行するかと云ふと大阪で発行する(編外本書)(何年カ)、それにはどうも彼方では出来ぬので、松坂の職工が宜いといふことになつて、松坂の職工を連れて行くには、恰度幸だで篤次郎を引張り出せといふ事から、出頭するやうにと云ふことで、和歌山へ篤次郎さんが行かれますに付ては、お前行つてくれぬかと云ふから、行つても宜いけれども……マア兎も角も行つてくれといふ事で、そ

れから私がお供して紀州へ行つた。さうした所が五箇国・通用の札の事を拜命になつて、是から直に大阪へ廻つて、大阪で店出しをせいと云ふ。それから大阪へ行つて、松坂の職工の重立つた者を呼寄せて、恰度高麗橋四丁目でした、通商司の権頭をして居つた吹田四郎兵衛、これが支配人で、それを引張り出して、あの兩替店の前の家へ銀札会所といふものを拵へた。

○柴 さうすると辻の角になりますか、兩替店は此方角で

……

○白塚 さうです、彼処へ会所を拵へて札を刷らせました。

所がこれは容易に通用しないぢやナ、朝投り出して遣つたのが、晩に戻つて来るといふやうな事でしたけれども、段々それが弘まつて来て、此調子なら宜からうに依つて、一旦ちよつと国へ歸らうぢやないか。もう宜うございませう、大分長くなるので歸りませう。大概これで順序は極めたし、四郎兵衛に万事させるから中歸りしやうと、それから歸つて参じまして、恰度水口に來ましたら伏見の戦争だ、あの年でした。それでいまだに私も記憶して居りますがネ、あの戦争でもつて、折角店を出したやつがベタ／＼になつてしまつた。もう四五年も早いと宜かつたけれども……

○柴 あれが一つありましたネ、跡の札の始末がしんどかつたでございませう。

○白塚 あれは何うなりましたか、何しろあの騒で、紀州家はあれからもうベタ／＼になつて仕舞つたのですから。それで私共紀州の役人で通つて居るものに依つて、途中では何度も私は引張られた、奈良でも引張られるし、伏見の夜船でも、藤堂の固めから龕燈提灯を持つて調べに來るし、それから鈴鹿の峠でもやられるし、度々私は引張られて止められたことがある。

○柴 篤次郎さんの和歌山にいらしたのは、それが一番初ですか。

○白塚 篤次郎さんのはそれが一番初です。

○柴 それで篤次郎さんがお出になつて、例の藤屋へ入つた、暫くお居になりましたか。

○白塚 翌年まで居つた。

○柴 それから六師園さんが松坂の方へおいでになりましたのですネ。

○白塚 六師園さんは、篤次郎さんのおいでの時分に附いて行つて、俺に附いて行つて呉れぬと云ふのは余り不人情ぢやないかと、いろ／＼言はれて、それなら仕方がないで行きませう。けれども是はマア六師園さんの事でしたので、皆草鞋がけで、戦争後なものですから、切れるやつでないといふので、何れも刀剣家だものですから、皆長いやつを帶して、草鞋を穿いて出掛けた。是はマア学校の方で

あつたもんですによつて……

○柴 一年半位居らつしやりましたか。

○白塚 一年半はお居がありませんだ、冬から出て、恰度帰りましたのが四月の十日頃でした。

○柴 学校の事だけで行つて居らしたといふことでございませけれども、そればかりでもないのでせう、矢張津田出だのいろ／＼な人が寄つて御相談したのぢやありませんか。

○白塚 それは多く学校が主でした。当時引越せといふのですナ、紀州の方へ——そんな事はとても御断りだ。それで六師園さんは浪士好きの方だつたで、酒でも上がると随分抜き兼ねぬ位の人だ。さうした所が世古格太郎といふ人が当時京都に居られて、是が三条様の股肱の臣だつた。それで京都へ行けば元方の方へ泊まるのだけれども、其処に泊らずに、さう云ふ寄合の処へ泊つた。恰度加茂の二条より上でした、三本木の先に中川瀬兵衛といふ大名の屋敷が残つて居まして、其処に皆世古だとか、さう云ふ浪人連中が余計居りまして、其処へ泊つてござる。私はそんな処に居つた所が仕様がな、私は御免を蒙る。それでは勝手次第の処へ行つて居ると云ふので、それから私は三条へ来て、三条の橋詰にめがね屋といふ宿屋がある。其処へ来て一人泊つた。デ昼は用が無いで方々ブラ／＼歩いて、泊るだけ其処へ泊つて、何でも五日ばかり滞在して帰りましたけれ

ども、冬の綿入を着て出掛けて行きました、四月に其服装で歩いて居つたです。そこで途中見張所やなんぞで怪しい思ふですナ、汚れくさつた綿入の黒紋付の袖の着物で、腐つたやうな刀の欄で、草鞋を穿いて歩くもんだで、どうしても安浪人としか見えぬぢやナ、それで彼方此方引張られたことが有ります。イヤ可笑うて、私が仮名を一つ使つて見やうと思つてやつて見たところが、どうしても白……と先へ出てしまふのぢやナ、妙なもので、悪い事は出来ぬものぢや、白……と云つて、あと何と言はう知らんと思つて、それから白井といふのです。塚の字は隠したけれども白の字が隠れない。あれは妙なもので、私は帰つてさう言つたのです、どうも人といふものは、初から嘘ついて歩いて居る人は、やはりそれで行けるか知らぬけれども、嘘はいかにも言ひたくないと思つて居る者が、偶に言ふて見やうと思つても言へぬものだと、大笑ひした事がございます。

○柴 さうして六師園さんは京都にお出になり、浪人に御会ひになつたりして、勤王の方のことは余程やつて居らしたのですけれども、それが私共には分らぬのですネ、例の御焼になつたと云ふことで、あまり書いた物がありません。

○白塚 尤も残つて居つた所が日記位のものです、其様な事の書いてあるのは。

○柴 何でも御交際になつた仲間から調べて行かぬと分りま

せぬ。

○白塚 その世古といふのが大勤王家で、そこで紀州へ行くにも、今の海軍に津田出といふのがある、あの人と津田監物といふ人があつた、これが矢張り紀州で、此人は楠公に何か関係がある人、紋は水に菊花の半分出た、あの紋を付けて居る人でした、至つて楠公家で、其人なども好きでした。さう云ふ連中があるものですに依つて、どうしてもさう云ふ方が多くやつて来るです。それから後に外務大臣をして居つた陸奥陽之助、あの人の方がありましたが、其等も出て来ました。其時分には家の手代などは、浪人といふと皆ビク／＼して居るのぢや、いろ／＼無心に来るものですから——。それで私共始終さう云ふ処に出会ふて居つたもので、呼びに来る、浪人が来たに依つてちよつと来てくれ。困るとは呼びに来る、何時でも御宅へ来ると私が出て行きおつたですが、さう云ふやうな人が始終出掛けて来る。

○柴 随分御合力ぢやない、好い方の浪人が来て居つたさうですね、書院の方へ何時でも泊つて居らしたと云ふ……

○白塚 来て居りました、それは貴所、仲町といふ処の宿屋に一人来て居りました、是等は立派に無心に来ましたのぢや。第一に町奉行に面会しやうと云つて来て、会ひもしませんでしたけれども、支配人が会つて、それから方々捜して歩いて無心に来たこともある、やはり仕方がなくて、終にと

うとう搦め取つたのもございます。あの時分にはどうも会津などが入込んで居るし——会津などは今の旧幕の方へ引張り込むのですナ。それで会津の浪士は長く泊つて居つて、さうして津藩の人が通行したのと——此人も一体は酒を飲むと少し暴い人ぢやつた、それと途中で摺違ふて喧嘩になつて、さうしてスポーツと抜いて会津の士の腕を斬つた、後ろから追駆けて来るやつを、クルツと回顧く途端にやつたものですから、腕を斬りました、紙入が半分に斬れる位だから、なか／＼良い刀を帯して居つた。サアそれは宜うございましてけれども、宿屋へ帰つて来て今度は刀を帯して——前には釣か何かに行つて、小刀を帯して居つた。それから宿屋へ帰つて長い方を持つて、後から追駆けて来て、^きといふ処で追付いて、さうしてとう／＼其を打斬つたですネ、殺してしまつた。それで翌日津から敵討に来るだらうと云ふやうな騒。それが始終紀州へ密談があつて、それが為に滞在して居る奴でしたが、紀州の方でもどうも追立てる訳にも行かぬので、大きに困つて居つた、さうした所がそんな騒が起つた。それから遂に此方から照会したことがございます、津の某といふことは判つて居るけれども、津の方でさう云ふ名義の者は此方に無いと云ふ回答をして来た為に、何処の者やら知れぬと云ふことで事なく済みましたが、其内に京都の会津の役所へ人を廻して、早く誰か

やつて呉れとか、いろ／＼の事を言ふて来おつて、どうも私も大きに困つたことが有りました。テ町奉行へ言ふて来る、町奉行から直には言はず、町内の事は皆大年寄に吩咐けるもんだで、大年寄は又そんな事を心配せにやならぬ。それで大年寄といふ役も大きに厄介な役でした。則右衛門さんの御往になつた折は慶応二年ですかナ。

○柴 初に往しつた時はそんなものでせう、それから明治になつて一度往しつた、何でも三度往ツしやつたやうです。

○白塚 二度かと思ひました。

○柴 それでは藤屋は能く御存じですナ。

○白塚 あれはもう私も和歌山へは其前に度々行つて居りました、其御札方の外に私行つて居つたことがございました。其折に藤屋へ泊つて、あの座敷を賃して貰ひたいがと云ふと、あれは斯う／＼云ふ訳で、元々京都の元方から建つたので、京都の元方なり旧主人家が見えると御入りになるので、客は為られぬのぢや。けれども空いて居れば宜いぢやないか。空いて居つてもどうもさう云ふ訳には行きませぬ。俺は松坂の三井篤次郎さんの御用で来て居るのぢやに依つて、尤も常は閉つて居るけれども、是非藤屋へ行つて泊れと、斯う云ふ指図に依つて来たのぢや。まあさう云ふ事なら氣遣もございますまいに依て、私共断り言ふことの出来るやうにして置いて貰はなければならぬ。それは大事な、

全く入用だつたら何日何時でも明けるに依つて賃してくれさう云ふ事なら御貸し申しますといふ訳で、それを借りて居つたのでした。テ借りて滞在中に、あなた御存知ですか、前の三井家の大元方といふものがある時分に勤めて居つた里田藤兵衛、あれが紀州に年頭に来おつてナ、入らうと云つた所が私が入つて居るのぢや、明けて貰はにやならぬと云ふ。そこで元方が見えましたに依つてどうか明けて貰ひたい。誰だと云ふと土方と里田と二人。好し／＼、それなら一つ会はう。それから私は土方と里田に会ふて、ときに私は斯う／＼云ふ用事で来たので、此方に来たに付ては、彼処が明いて居る筈ぢやに依つて彼処に泊れ、さうしないと御用を扱ふに、書類や何ぢややら散ると可ぬからといふ篤次郎さんからの御指図であつたもので、来て入つたのぢや、何時でも明けますに依つてと言つたところが、土方も里田も、片方旦那の指図だと云ふたものだから、イエ旦那が見えればけれども、私共はマアどうでもと云ふやうな事で、それなら何卒さうして貰ひたい、是非明けんならぬやうな事なら何時でも明けるから……イエさう云ふ事なら差支ない、私共も彼処へ入つたとして置きさへすれば立ちますので、私共さへ承知して居れば済みますのぢやと云ふ。それならさうして置いてくれと頼んで、暫く滞在して居つたことがございました。あれは又誰も入れぬぢや。

○柴 いつも閉めてあるさうですナ。まだ有るといふ話です。

○白塚 今はどうだらうか、藤源といふ者が居るか居らぬか。

○柴 何でもあの家の者が、京都の銀行に使はれて居つたさうです。先達で此方でちよつと御伺ひしました、一遍彼方へ行つて見よといふ仰もございました、今度彼方へ行つたら、一遍改めて藤源へ乗込んで見やうと思ひます。

○白塚 片方に三尺許りのずつと奥へ通る路があつて、奥の正面に玄関があつて、ちよつと上下泊れるやうになつて居ります、湯殿も別になつて居り、大きに宜うございました。

○柴 やはり御城の側ですか。

○白塚 あれは本町といふのです、御城の京口から二丁許りしか無い、通り筋。マア藤屋源兵衛といふ者が名高い宿屋でした、あの演劇でする吉田屋に紙子着て来る演劇がある、私はあまり演劇は知らぬが、夕霧伊左衛門……

○柴 ア、さうでございますか。

○白塚 あれが何でも藤屋伊左衛門ぢや。

○柴 それは一つ帰つたら尋ねて見ませう、室の方に演劇通がありますから、又何か面白い話が出て来るかも知れませぬ。まだ藤屋の方をちつとも知らぬのですから、あれも調べて見たいと思つて居ります。

○白塚 東海道に定宿といふものが元とありました、あれが御宅々の座敷が建つて居つた、私共小口からも知りませぬ

けれども、今はあれ等はどうなつたか。

○柴 名前だけは分つて居ります。

○白塚 草津の藤屋、それから坂ノ下にありましたし、亀山の地藏様の横町に角屋といふのが有つた。其時分には供して行きますのに、旦那方の茶代が百疋だ。夏などは真蒼な折目の正しい、一度も使つたことの無いやうな蚊帳を下げ居つたが、それで茶代はどうかと云ふと一分、今の貳拾五錢ぢや。けれども其時分の一分といふものは、なか／＼今の十層倍ぢやナ。

○柴 もつと行くかも知れませぬ、此頃になると十層倍以上かも知れませぬ。あの宿々を一遍膝栗毛をやつて見たいと思ひます、今は汽車で行くのですから、今度一遍一つ／＼歩いて見たら、随分あるだらうと思ひます。彼の宮の宿あたりでも、室町様の二代さんが歿くなりまして、宿屋が分つて居る、其辺へ行つたらいろ／＼な物があらうと思ふ。

○白塚 宮の何とか云ふた、彼処に始終下り上りに御休みになる宿屋がございました、直に乗場の前の処に——何とか言ひましたわい、私も其宿屋へ行つたことがございます、其処が定宿でした。

○柴 さう云ふ処まで行つて能く調べて来やうと思つて居ります、さう致しませぬと本當の事が……

○白塚 それは極宜いことですナ。此方の方は私共あまり

度々通らぬものに依つて分りませぬが、亀山から京都の方へは、私共度々通つたので知つて居りますけれども、さう云ふのは皆元々普請料といふものか何か出してある、さうらしい様です。

○柴 それで皆大元方へ、普請でどうぞ金を少し足し前を願ひたいとか何とかいろ／＼来て居る。それから又呉服店の方であると、買宿から種々な御合力が来て居る。それを見ると何処の宿は何処といふことが分るやうになつて居る。それで一遍ずつと行つて見やうと思つて居るのですけれども……

○白塚 一遍明治七八年頃の事です、木屋町さんが御帰りの折に、船で行かずに陸地を御帰りになつて、掛川だつたかに宿屋を指して行くと、他の宿屋がどうぞ私の方へ是非泊つてくれと云ふ。大方奥さんも御一緒だつた。それで宿が指してあるかと云ふと、何分どうぞ準備がしてあるで、是非泊つてくれと云ふ。宿料など、皆目そんな事に関はらぬのだ、是非泊つて貰はにやならぬと云ふので競争になつて、仕方がなしに其宿屋に入らして、御馳走はしました、それが宿料も何も言はぬのぢや、構ひませぬ、来て泊つて貰ひさへすれば宜いと云ふ。其様な事がございましたが、明治七八年頃だらうと思ふ。

○柴 一遍御帰りになつた事がありました、さうして纏めて

彼方へいらした、其時ぢやございませぬか。

○白塚 さうです、纏めていらした、奥様も皆一緒でした、能勢規十郎が御供して……

○柴 能勢もそんな話をして居ました。能勢はよく北さんに出入して居つたものですから、彼方の事で……併し今日はいろ／＼伺ひまして、是から御懲りになりませぬやうに……

○白塚 私も御断りして置くのは、今呉々もお話する通り、どう云ふ事からお話して宜いやら、ちよつと順序も立たず——大分疾からの御約束で、是は御出になつたら、調べて置いて記憶して置かうと思つては居りましたけれども、つい日々の事で取紛れて、能うまだ揃も出来ず……

○柴 私の方で今度は、此れと此れとを伺ふといふ積りで考へて来ます。

○白塚 どうぞさうして戴きましたら、それから又それに就ていろ／＼……

○柴 先程大阪の両替店の向に銀札会所が出来たと云ふ、其時の絵がございますで、今度持つて来て其を御覧に入れませう。恰度大阪へ行つて、彼方の店に居つた画家に描いて貰つた。今度両替店の話も伺つて見たいと思ひます。銀札の話に、まだ木版を江戸（木版）に誂へました、そんな物もあります。私の方から種を持つて来ますから、それに就て御話を

願ひます。

○白塚 どうぞ成たけ沢山に……此札に黄なのがある、此れが三分で、黄なのが二分、青いの五分、それから老奴と斯うあつたものです、あまり其後は見ませぬが……

○柴 黄と青とがありませぬ、是は松坂に行つて彼方で集めたのです。それから東京でも集めました、どうも集りませぬ。

○白塚 松坂もなか／＼あ、云ふ地方ですに依つて、一枚参考品に除けて置けば置くやうなものだけでも、なか／＼使ひますから……

○柴 三四度参りました。

○白塚 港町に永井(長)といふのがあります、彼処には有りますでせう。

○柴 一体松坂(朱傍書明治九年十二月)も暴動の時、それから二十六年のあなたの御類焼になつた彼時の火事で、いろ／＼な物が皆焼けてしまつて居ります。

○白塚 私は先刻も御話した通り、旦那が浪人好で居られたものですから、やはり雑魚も魚の中で、そんな方の事が好きで歩いて居たもので、刀が二本ありました。其刀が囚徒の首を斬つた仕置の刀で、能く斬れることは分つて居る、首を幾つ斬つたか分らぬ。其を手に入れました持つて居つたが、恰度私が東京へ出て来る時分に、御宅へ預けて置い

たのです。それを暴徒で焼いてしまつて、大笑ひしたことがございます。

○柴 一体松坂はいろ／＼な事で焼けて居りますから、私共の調でも実は困るのです、有りさうな物が無いのですから……

○白塚 有りますまい。今はどうなつて居りますか、芝居町(宿屋町)といふ来迎寺の裏の処に、紀州家から拝領した下屋敷があつた、中へ川を取つて……

○柴 南龍公が褒めたといふ庭でしたナ。

○白塚 座敷は平日注連を張つて誰も入れませなんだ、それを今の大殿さんが其処に御入りになつて、もつと庭を詰めよと言はしつて、それで入用だけ抜けるのぢやつたけれども、後が困るもんだで狭くしてしまつた。庭は狭かつたけれども川が中へ取込んである、あの地所はどうなつて居るか。

○柴 何処か他へ行つたやうな様子です、一遍伺つて見たいと思つて居りましたけれども、其儘になつて居つた。皆さんが此方へ居らつしやつて居つたから、跡はいろ／＼の事になつたやうです。

○白塚 あれなどは、今では何だけれども、徳川家時分には随分威張つたものでした。徳川家から拝領といふので大切にして、注連繩を張つて居つたです。

○柴 店の図などにも、松坂の図がありまして、拝領の下屋敷と書いてございます。あ、云ふ由緒のある処は残つてあれば宜いのですけれども、種々御改革があつたものですから、いろ／＼になつて仕舞つて居るらしいでございます。

○白塚 あの三井の前の宅は、角に土蔵があつて、隅が鉤の手に高塀でしたが、其高塀の上に二方鉤の手に格子が附いて、物見になつて居つた、中は飛石を渡つて行つて、段で上つて覗くやうな窓でした。是などは物見御免の窓と云つてやかましい窓で、人が来ても皆仰向いて見て居たものです。何しろ御旧家ですからさう云ふやうな事も……

○柴 それに旦那様方も、松坂の事にはいろ／＼気を付けて居らしたやうですから……

○白塚 それは面白い事があるのですけれども、三井家の家風として、御承知の通り抑へてありますから——紀州から御用で召されても、三井家としては二本帯して行くことが出来ぬのでせう、けれども役として二本帯さにやらぬ、そこで二本帯して行きましたけれども、已に篤次郎さんなどは叱られてござるだナ、それが為に塾居といふやうなものだ。

○柴 余程あれ等は、世間から見れば面白いやうな事だけでも、御叱りになつたと云ふのは妙な事ですナ。

○白塚 それで大きな事は内では言へぬですナ、デ篤次郎さ

んは三井宗十郎の家名を譲つて篤次郎といふ名前になつて、紀州の御普請を拝命して、何うしたつて斯うしたつて二本帯して行かなければならぬ。所がさう云ふやうな事で二本帯することがやかましかつたもので、誠に困つたです。

○柴 けれどもあの御家風が誠に好いことだと思つて居るのです。

○白塚 それはマアあれで御当家が続いたのですからネ。

○柴 これは余分の事に互りますが、何時でも私共の方で言つて居る、二本帯することが成らぬと云ふのが三井の家風だから、是が何時迄も通らぬといかぬ。京都に行つて大旦那にも申上げました、二本帯して成らぬのが御家風ですから、明治になつても、明治流の考で矢張り是ですと申上げたら、ウムさうだと仰しやつて居らつしやいました。實際さうでございますナ。

○白塚 全くさうなんです、其位厳だつたで此処まで来て居るのです、随分道楽な人が多くて何でしたけれども、マアそれで漸く保つのですナ。

○柴 明治になりましたら、明治流に二本は成らぬと云ふ流儀が出て来なければ、世間一般と同じやうな工合になるとちよつといけません。

○白塚 けれども京都は京都であり、伊勢は伊勢であり、丸潰しにも出来ず、それならと云つて帯さぬ訳には行かず、

それで旅帯刀といふのを拝命して、旅をする折に帯す、間は帯さぬと斯う云ふので、二本帯して行く折には何でも旅帯刀だ、さうでも為なければ仕様がな。そんな事に此方で又余計な何が有つたのです。

○柴 御一新になつて、一番先に刀を脱つたのは三井でございますからネ、朝廷から廃刀の令が出る前に——あれが一番私は宜い所だと思ひます。新政府に対する勤王でも、一番三井家が先でございますもの。

○白塚 これは先どころぢやない、何百年も前からだからナ。あゝなると、維新となつた以上はどうしても彼処迄至らなければならぬ、畢竟戦争の為に二本帯したのだから。さもなければ要らぬものでサア。

○柴 さうです、早くに大元方から申渡が出て居つて、私の家は昔から廃刀だ、旅刀だけは許されて居るけれども、今度斯うなつたからには、皆刀は脱げと云ふ申渡が出て居る。さう云ふ訳なので、勤王も一番魁なのです。さう云ふ御話から段々横へ入つて来ると、余程面白い事があります。其代り篤次郎さんが御叱りに逢つたことも已を得ませぬ、御家の家風でございますから……

○白塚 どうもそれは仕方がありません。

○柴 いろ／＼吾々が調べて見ますと、旦那方皆様が余程御苦心なすつて居らつしやいます。松坂に居らつた方など

が、余程いろ／＼な事をなすつて居らつしやる。まだ申上げやうと思つて申上げませぬ、極近頃分つた事ですが、高蔭さんが本居に始終補助なすつて、手伝つて居られたことは已に分つて居りましたが、今度本居の墓を拵へました費用は、一手で高蔭さんが御引受になつたやうです、本居の墓は私がすると云つて、費用は皆高蔭さんの方から出る。それは私の室の方の物には無い、本居の家の方の手紙には皆ある。つい二週間程前に聞いて参りました。さう云ふ事は世間に知られて居ない事で、余程面白い所なのでございます。御一新の出来ました動機も、本居が言ひ出したやうな事がある、其本居に石炭を与へて焚いて居らつしやつたのですから……。

○白塚 高蔭さんは本居門下の十哲の中だで、私共高蔭さんの短冊を三枚ばかり持つて居つたし、大分あの方に書いて貰ふたのを持つて居りましたが、皆それを焼いてしまつた。高福さんの画なども、横濱に来て居られた時分に、私が傍に居つたものだから、頼まれたのも画いて貰ひましたし、自分にも十枚許り紙に画いて貰つたのがあるけれども、其も焼き、嘉栗さんの画讚も私持つて居つたが……。

○柴 それも焼いたのですか。

○白塚 焼きました、それから此方（松坂家）の桐糸齋といふ方がございます、是も歌が出来ましたで、私は短冊を三

枚か書いて貰つて持つて居つたが、悉く何も彼も、ホン着のみ着のまゝに焼いてしまつた、母と姉だけでしたもので、運ぶことが出来ませぬでナ、残らず焼いてしまつた。

〔表紙〕
白塚喬太郎氏談話速記 第一回〔其二〕

（本書）
（三井文庫所蔵史料 特二二二）

白塚喬太郎談話速記（第一回） 其二

○（長谷川篤印）

明治四十四年七月十八日於新町家

○白塚 私は一遍よく調べて見たいものぢやと思つて居りますけれども、段々延びて遂に質さずに来たのは、名古屋の伊藤次郎左衛門、あの人の店が御承知の呉服屋で、松坂の元の本店の店先の格子と同じ格子なんだ。それから港町の長井の前に桜井七郎右衛門といふ、是が旧と売薬をやつて居ました、売薬と云つても品は今のやうに沢山は無い、家で製する薬、其処の格子がやはり同一の格子だ。私は直きに目が着く、始終見て居るものだから……。さうした所が松坂の失火後、当時の桜井の相続人が、あの格子を拵へて呉れと言つて来た。それは何故だと云つた所が、旧と三井の本店の格子を貰ふて附けたのだと云ふのです。さう云ふ

例があるに依つて呉れと言つて来た。尤も御親戚になる。それは更に断つてやりましたけれども、名古屋の伊藤次郎左衛門の格子がやはり同じ格子なんだ。

○柴 今度一遍行つて見て来ませう。

○白塚 今はどうなつて居ますか、若し御出になるなら、誰かに尋ねてから御出になつたら宜うございませう、少し以前より模様を換へたと云ふから、今はどうなつて居るか知れませぬが、彼処に伊藤銀行といふものが出来て居つた、明治何年頃出来たものか、私の行つたのが明治二十年です。デ銀行集会があるので、其処から番頭がやつて来る、いろ／＼の話から私が其格子の話をしたことがある。ところが其人の言ふのにも、それは尤も同様でございませと云ふのだ。どういふ訳かと云つた所が、どういふ訳ですか、あれは松坂の三井さんの店の格子を貰ふたんぢやと云ふ。それで貰ふには何か縁故が無ければならぬぢやないか、どういふ訳だと云つたところが、其男も確とは答が出来ない、併し三井のと同じだ、どう云ふ所からさうなつたかは、ちよつと私も返辭が出来ぬけれども、既に私の方の標が円に井桁の内に藤の字が書いてある、それは何かと云ふと、越の字を書くのと三井の店の標と同じになる、それで私の方は其を抜いて藤の字を付けやうと云ふので、藤の字を付けてある、是も何か関係があるのぢやと斯う云ふのだ。それで私

は充分一つ調べて見やうと思つたけれども、其うち私は転勤するし、それなりけりになりましたが、御承知の通に、

下谷に伊藤松坂といふ者がある、あれが可怪しいですネ、伊藤の本家といふものは名古屋にあつて、名古屋で商売して居る、さうして彼の店を昔から伊藤松坂といふ、マア何時頃から称へるか知らぬが、伊藤松坂と云つて居る、名古屋の人であつて松坂屋と名乗るのも変な話だ。

○柴 私もし終それを思つて居る、伊藤松坂といふ彼家に就ては、いつか調べて見たいと思つて居りますが、向ふ家の話を聞きますと、享保の末頃に家憲が出来て居るさうです、其家憲を見ると少し思ひ当る節があるのでございます。○白塚 何か其男が言ひ居つた、私も精しくは聴かぬけれども、さう云ふ次第で、固よりあの暖簾も三井の暖簾である、けれども何う云ふことか中を藤の字に換へたので、あとは残らず其通りである、大方あなたの方の親類に違ひありません、せぬぞと言ひおつた。それから今の格子が同一ぢやと云ふのです。

○柴 一尺四方位の楳ですナ。

○白塚 二寸五分もある楳の大きな角、私共が恰度首を出して外を覗いて見おつた、其位の大きな格子だ、それと同じ格子が入つて居る。それで桜井七郎右衛門といふ人の格子は分つた、前に桜井が貰ふて為たのぢやに依つて、其例に

依つて呉れと云ふのだから、是は分つて居る、又正しく御続き合の事も分つて居るが、伊藤松坂がとんと私に分らぬ、何で伊藤松坂と云ふのか知らんと思ふて、ちよつと質しかけて見たのですが、折節私は転勤したもので、其処迄は分つたけれども、其先が答が出来ませぬで、どう云ふ事からさうなつたのか、何時頃からさうなつたのか、それは私にも分らぬけれども、何でも昔は御親類かも知れぬといふやうな事を言ふて居りました。

○柴 それは好い事を伺ひました、私も疑にはあつたが、其紋の話は今迄聞きませぬ、初めて伺ひました、問題にして段々に調べて見ませう。と云ふのは享保頃に先方の家憲みたいなものがある、それがちよつと耳寄の処がありますから……

○白塚 伊藤は京都の、恰度今の新町様の前です。

○柴 彼家に書類が集めてあるさうです、手順を経て調べて見れば分るだらうと思ひます。それから此方の物で見ると、宝永の時分に、名古屋に一軒呉服店を拵へたい積りである、名古屋の御家中からも店を一軒拵へては如何だと云ふ勧めがある、拵へやうと思ふが、どうも少し都合が悪いで、マアよく考へて見やうと云ふ事だけ書いてある物がある、其先拵へたとも拵へぬとも書いた物が無い。それでどう云ふ訳で其話が止つたのやら何やら分らぬが、そんな処が何かゴ

チャ／＼して居る事があるだらうと思ひます。

○白塚 それでは松坂の三井の名義で、支店といふやうな事にでもして、伊藤といふ人が出したものか。

○柴 どうも分りませぬが、今のお話で鳥渡さういふ事を思ひ付いた。御存知の通、「越」の字の暖簾といふのは二等で、一等は井桁三文字を貰ふのですから、兎に角店に使はれて居る者ならば、一等の暖簾印を貰ふのでございますけれども、二等のを使つて居る所を見れば、何かさう云ふ事に關連して居る所がありはせぬかと思ひます。

○白塚 どうも然うぢやないかと思ひます、三井に「三」の字がある、それを取つて「藤」にしたか、「越」の字を取つて「藤」にしたか、是等は少し判然しませぬ。それから池鯉鮒に御承知の通三井寺といふのがあります、木屋町さんが見えて、私もあの辺歩いて見ましたが、彼等は此処が本當の墓地ぢやと言ふけれども、どうも後から拵へた物のやうにしか見えぬ。

○柴 あれハ私も行きました、貴所の往しつた後に岡が往つて、先頃私一人行つて止めを刺して来ました。ちよつと失策つたものですから、二度と行けぬやうな事になりましたが、併しもう行かなくても宜いと思ふ、あれは後に拵へたものです。桶峽の戦争で戦死した人間を埋めた、其墓地でございます、其上に山師坊さんがあつてあ、云ふ墓を拵へ

た。

○白塚 あの坊様が、俺は越後守の弟やと云ふのだ、それで今の戦死した者の為に、俺はもう二たび士にはならぬ、又町人もいやだ、付ては出家をして、戦死した人々の亡魂を弔ふ為に、こゝに三井寺を建てたのぢやと仰しやる。それで此檀家といふ者はどう云ふ事になつて居るか、檀家でも無ければ仕様がなぢやないかと云ふと、イエ檀家といふものは余計無いが、此処の檀家は私共の家来を皆檀家にしたのぢや、私共の家来が皆落ちて百姓になり、町人になりして、それが檀家として今日まで来つた。爾来多少殖へたり減つたりして居るけれども、まづそれが本ぢやと彼処の坊主は言ふて居る。

○柴 彼処に寺の系図がありまして、天保頃に拵へた系図でございますが、恰度天保頃に彼処の坊様がさう云ふ事を思ひ付いた。それがどうも津か一身田あたりの坊様らしいのでございます。

○白塚 私共の考では、天保より後ぢやらうと思ふのだがな。尤も尾張に、あの何名白屋からよりも南西に偏りますけれども、一ノ宮といふ処がある、其処からちよつと十四五町東の方に當つて三井村ミヅキムラといふ村があつた。

○柴 私は彼処へは能う入りませんかつたが、有りますネ。
○白塚 今は其村を廢してしまつて、合併したのになつて

居る。恰度一ノ宮に味噌屋の太兵衛とか云ふ者があつて、其老爺を知つて居たので、其処へ私は視に行きましたが、成程寺は昔の三百年前の建物ぢやナ、台所から其他の工合は——其外大分修復した処もありますけれども、寺は随分古い寺ですが、何も訳が無い。

○柴 彼辺のは、何うしても此方とは違ふのですから。

○白塚 尤も関係は更に無いのですナ。それが彼処へあ、云ふ村がある位の事ですに依て、池鯉鮒のなどが、やはり其様な処からの続き合ぢやらうと思ふです。それが追々此方は永続して、ズン／＼と盛になつて行く所から、そんな事を思ひ付いて、こぢ付けて行つたものと見えます。

○柴 随分あ、云ふ流儀のものは彼方此方にありますで、それを巧く選択をせぬと、ツイ私共瞞かされるのでござい

○白塚 随分あの辺にも、今謂ふ伊藤次郎左衛門のやうな者があつて、三井と同じ格子を付けて居るといふ家があるものだに依つて、唯普通三井寺とか三井村とか云ふと、何やら此方の三井家に関係があるやうに、ちよつと人は思ひますしナ。

○柴 寺の方ではそれを利用して、いろ／＼やるので御座いますから……

○白塚 あれはマアどつち道、私もちよい／＼行つたし、能

勢も態々行かれました。

○柴 兎に角一方から言ふと、あ、云ふ物が有るといふことが、三井といふ名前がどれ程まで世間で考へられて居るかと云ふ、其例にもなるのでございます。直接関係は無いが、一方には講談、それ等も漏なく、私共始終気を付けて居ります。京都に上りましても何時でも申上げますけれども、あれはあの儘注意致して居ります、それよりももう少し本筋の処を明にして置きたいと思つて居るのでございますが、段々本筋の処も分つて参ります。

○白塚 それから三井義喬、旧幕臣にあつた、あれなども私共行つて……

○柴 薬剤師でございませうか。

○白塚 薬剤師。是非士はいやだから町人になると云つて、舎弟がやつたのが貴所の方ぢやと云ふ。さうした所が、あの家の人もしつかり分らぬのだ、書類が無くなつて居つて——。それで自分の方の書類を持つて、親父からなど聞いて居るにはさう聞いて居るけれども、それが確めてないから確めたいに依つて、之と引合はして、貴所の方のも聞かして貰ひたい、私の方のも上げますと云つて、書類を北様へ差出して置いたのぢや。さうした所が、北様が又早う還してしまふと宜いものを、抛たらかしてあつたのぢや。それで半年経つても一年経つても沙汰が無いものぢやに依つ

て、大變怒つて北様へ尻を持つて行つた。それで平謝りに謝まつて其を還すと云ふやうな事、向ふの戸主は大變立腹して、分らにや分らぬで宜し、又家のは御話が出来ぬなら出来ぬと云ふが宜し、又出して置いた物は見たのやら見ないのやら、見ても大事な、見たけれどもお還し申すとか、見ませぬけれども是は御返却するとか、還すものなら早く還すが宜い、半年も一年も引張つて、此方から催促に二度も三度も行くといふやうな馬鹿な事があるものかと云つて、えらい怒鳴つて行つた。それからマアそれは全く失念して居つたのぢやらう、実は斯う云ふ訳ぢやつたと、私がいろ／＼何した所が、先づ兎も角も先生一つ見てくれと云つて、種々の物を出して来て見せる、見たがさつぱり分らぬぢやナ。さうした所が彼処の先祖といふものは、三井弥市とあるやうだ。弥一といふ人は甲州に下つた人だ、それが三井弥市だ、江州から甲州へ下つて、それから甲州と徳川家との和睦の一件が起つて、徳川家から使者を甲州に遣つた所が、それを打斬つた。斬つたに依つて、此方へはちつとも沙汰が無い、段々様子を聞くとなつてしまふた。それで家康公も大變立腹して居る所に向つて、三井弥市が其首を斬つた奴の首を又斬つて、それを掲げて徳川家へ降つたのぢや。それが為に三十番神の兜といふものを貰ふて、其首を入れて来た兜と二つある。それで借財をして、一つは他に

抵当物に入つて居るとやら申して居りましたと云ふやうな事で、徳川の家来の三井といふ者は、さう云ふ者ぢやと云ふことが正しく分つた。デ此方に關係の無い者といふことは分りはしましたけれども、先方では矢張りそんな事を言ふて居るですナ。それで弥一といふのは違ふぜと、私が彼方で話した事でした。それから其三井といふ人にえらい心易くなつて、私共にも訪ねて来たり、私も行きもしたりした。

○柴 あの甲州の三井といふのも、是までは江州の此方の三井から分れて行つたと云ふことになつて居つた。近來段々調べて見ると、それより前にあるのです、例の乗定さん、高久さん、あの方より少し前頃に、甲州にも三井といふのが有るのでございますから、あれはどうも別らしうございませす。

○白塚 別らしい、三井弥一何とか云ふた。それから紋はやはり四ツ目と揚羽の蝶だ。

○柴 平家ですナ。

○白塚 此方は四ツ目だ、彼方は四ツ目と揚羽の蝶がある。

○柴 揚羽の蝶で面白い事があるのです、本来江州の三井と書いてあるものには、揚羽の蝶の紋があるので、蚊帳に――。デ此方は本来藤原なんです、彼の高久さんと云ふ人が養子に見えたから、それから源氏になつて四ツ目になつ

た、其前はどうかと斯う云ふ問題なのです。揚羽の蝶なら平家だ、佐々木三井と平家の三井といふものがあるのぢやないかと思つて居つた、けれども此方は藤原だと斯う云ふ。それから段々調べて見ると、三井家に藤原姓の人があるのです、どうしても江州の三井は藤原姓らしいのです。何故それなら蚊帳に揚羽の蝶の三井があるかと云ふのに、それは今日は疑になつて居る。所が富士見の御宝蔵番に三井といふ家がある、それが平家なんです、揚羽の蝶を使つて居る、其家の筋だらうと思つて居りますが、甲州の三井も其筋だらうと思ふ。

○白塚 幕府の三井義喬といふ人は、江州から甲州へ降つたとあるのだ。

○柴 あれが三井と書いてありますが、ミツ井と読まずしてミ井かも知れぬです、此方は何時でもミツ井、此方の名前が大きくなつたものですから、ミ井といふのが皆ミツ井と云ふやうになつた。

○白塚 それは大きにさうなつて居るかも知れぬ。

○柴 現に殿村の家に居る三井芳松といふ人、あれは大和から出たミ井、御井が三井になつてミ井、あれなども芳松さんの家では伺ひませぬが、ミツ井芳松と云つて居る、やはり通音を取つてやるのですネ。

○白塚 江州の三井寺が三井ですものナ。

○柴 それからはなどは本当のミツ井、彦根の家来に満居と書いてミツ井と讀まして居る。此人は元と江州の人で、三井と書いてミツ井と云つて居つた、所が彦根が彼処に来て家来になつたから、井伊の井を避けよと云ふ命令で、それでは満居と書いて元通りミツ井と讀ますと云ふ、それ等は江州の三井の家だけれども、他のミ井といふのが真似して居るのが随分あるのです。

○白塚 それも今日は多いに違ひない。

○柴 併し一時は江州で余程勢力があつたらしいです、段々調べて見ると面白うございます、其勢力の有つた大きい所が分つて来ます。余談に入りますけれども、實際高久さんが今日迄分らなかつたです、系図にはあるけれども、實際其人が居られたのやら居られぬのやら分らぬ、系図にあるから居られた人と斯う云ふ風にしてあつた。所が此間少し物を調べて見ました、段々調べて来ると面白うございまして、實際高久といふ人は居られたのです、他の正しい材料にちやんと載つて居ります。デ是は間違ひないと云ふことに決めて、居られた時代がきつかり分つて来たのです。恰度足利將軍の嘉吉文安といふ頃に江州に居つて、少し仕事して居られます、それが分つて来ました。さうすると高久さんが決りましたから、もう他の違つたやつは皆篩ひ除けることが出来た。それで安土の浄厳院(佐々木の社の横に

ある)観音寺の関係や何か分つて来ました、一時は余程威張つたものです。

○白塚 何にせよ此仕事は、雲を攫むやうな所から御調べになつたのちやで、御苦心のことは実に御察し申上げますわい。皆其処まで調べずに、唯ほんの鼻の先の事ばかりより調べて居りませなんだものだから……

○柴 それは無理ございませぬ、それが私の仕事だ、さうせにや私のやつて居ることは申訳が無いのですから……。

たゞ其処といまの円光院、此間ですネ、之を京都の大旦那が始終仰せらるし、其処をもつとやれ。承知致しました、仰せられぬでもやる筈なんですけれども……

○白塚 もう一息ぢやな。大旦那も度々此方へ出て見える、見える度にいろ／＼御尋にもなる、御尋ねになるに付ては聞いて居ることは言ひ——私共も亦変に、先刻ちよつと御話したやうな関係で、別に頼まれも為なければ、自分の利益にする気でもない、唯何となくそんな事を調べて見たいのが病だ、好きなんぢやナ。

○柴 斯う云ふことは好きでない出来ませぬ。

○白塚 妙なもので、人の事で詰らぬやうなものだけれども、さう云ふ履歴を調べて見たり何かすることの好きでない人では、逆も出来るものではない。それハ拵へ事は拵へるかも知れぬ、好い加減に前後を見て、其間を繋いで置く位の

ことは出来るけれども、なか／＼嫌な者では此調は出来るものぢやない。私共今では関係はありませぬけれども、白塚の三井の方を調べたのは、私が国へ帰つて、新宿の家に着くなり、私の事ぢやでズツと奥へ通つてしまひます。店に人が着て居て、主人が話をして居つた、其傍を通つて私が奥へ入つた。所が其人も妙な人で、あれほどなたでございませぬといふ、尤も私は洋服を着て居つた。イエあれハ親類の者で、私の叔父でございませぬ。三井の方ぢやありませぬか。三井の者だ。さうですか、私の懇意な処に三井といふ家があつて、それが此方の三井さんと親類ぢやと云つて居りますといふ話をした。それで其客が帰つて行つてしまつてから、今来て居つた人が斯う／＼言ふて居りますが、白塚の側に三井といふのがあり、それが三井の親類ぢやと云つて居る、妙な事を言つて居りますと云つて私の甥が話をします。それで予て三井の調の事も能く承知して居るものですよに依つて、それなら一つ其を案内して見せて貰へぬか何うぢや、聞いてくれぬか。それなら聞いて見ませうと云つて、手紙を書いて置いて、翌日其家へ向けて行つて話をすると、イエもうそれなら御供して御案内しませうと云ふ、それから行つて調べて来た。そんな事も、聞流しにして置けばそれ迄の話ぢや、けれどもさうして調べて置くと、本郷の三井の方の続きも分るし。

○柴 あれは已に非常な問題でした。

○白塚 向ふにやはり小野田さんからの手紙が行つて居ると云ふやうな事があるものぢやで……

○柴 あれも貴所の御話を聞いて、嵐が岡と一緒に、写物に依つていろ／＼の議論が起りました、彼方だと云ふのと、一方で山田だといふのと、私の部屋で二説になつてしまひまして、私共はあれらしいと云ふ、嵐の方は山田だらうと云ふ、どうも併し景重らしい。それからとう／＼斎藤といふ同僚ですが、三上さんと一緒に行つて分るだけ調べて来ましたが、どうもいけなかつた、こちらでは写だけ見たものですから、行つて実物を見ると、書いた物が新しいのです、天保頃に書いたものらしい、どうもいけませぬ。それから山田に行つて見るとどうも然うらしい、それから何うしても山田に違ひないと云つて……

○白塚 尤も此方のは、小野田さん時分にきまりで行つた。

○柴 それから山田も近来私が調べて見るといけませぬ、違ふ筋なのです。それなら詰り何うだと云ふと、分らなくなつた、又元の通りになつてしまつた。今度はあの辺を突つきたいのです、相可から射和、どうも私の考では相可、射和、あの辺から松坂へ来られた。相可射和へは何処から見えたと云ふと、是は又一つ調べて見なければならぬ、相可から射和、あの辺に三井が多い。

○白塚 あの上に丹生といふ処がある、彼処にも三井といふものがある、今は無いのです。

○柴 あの家も行きました、三井丹丘といふ人、あの裏に墓があつて行きました、過去帳なども調べましたが、あれは越前から来て居る。越前、加賀、能登、越中、あの辺に又三井といふのがあるのですから、そんな所の關係らしいのです。さうすると今度江州から彼方へ一先づ移つて、それから此方へ来たのぢやないかと云ふやうな風になる、だから今日はもう分らなくなつてしまつた。何処からか片付けて行かなければなりません、片付けて行くと変になつてしまひまして、実は困つて居るのです。何処か知らんには決めたいと思つて居りますけれども、あの松坂といふ処が曲者でございまして、江州との關係が深いのでございます、例の蒲生が来まして……

○白塚 さうです、それは一番古いです。已に日野町といふ、あれが江州から随いて来て、土着するに付て日野町と云ふた。それで松坂の年に一度の祇園会には花車が出る、七町内から出る、其七町内出る中に、あの日野町の花車が一番先に通らねハ、外のは曳くことはならぬやうに昔からなつて居る。それは何ぢやと云ふと、日野町が松坂町の本ぢやと云ふのだ、それから段々出来て来た町である。

○柴 あの日野町へ蒲生に随いて皆来た時に、江州の商売人

があの中に入つて来たのぢやないかと云ふ疑がある。だから日野の蒲生の方を調べて見れば、其方から手取り早く分つて来はせぬかと思ふのです。日野といふ処は御承知の通り八幡に近い処、多分其筋ぢやないかと思つて居るのでございませぬ。それが今の所では三井といふ家の筋道を調べる、御家から見れば家の分る大切な処でございませぬけれども、それだけではないので、段々調べて来ますと、非常なる意味を有つて居ることございまして、例の伊勢商人、三井家も伊勢商人の一として江戸へ来て、伊勢商人の徳川時代の勢力といふものは非常なもの。一方では江州商人、是は京都から西の方へ行つた、是が又大切なもの。此二つが今日では別々の歴史の上から考へられて居るが、段々深く調べるとくつついて居るらしい、伊勢商人の遣り方の種を江州から伝へて、さうして伊勢商人が出来たらしい、其伝へた所が何処かと云ふと日野ですナ。

○白塚 それは然うだ、何故といふと、伊勢は私の生れた処ですが、総て伊勢の商人が今日迄、何時頃からか、何代も商業を営んで居る者の言ひ伝が、江州商人の風をせいと云ふ、あの土地で土地の商ひ振をせいと勧めぬ、江州の商ひ振を学ばにやいかぬ。小僧等を叱るにさう言ふて叱つたものです。元よりあれは江州から彼処へ移つて来たには違ひない。

○柴 それで大切なくつ付き目が何時頃だと斯う言ふのです。つまり江州の佐々木が没落してから此方へ来た時に、三井といふ人は一緒にやつて来たのだらう、さうして伊勢で商売を始めた、伊勢商人の魁をなしたものだと言ふやうになつて来ると、今日の三井家の歴史といふものは、非常に意味の大切なものになつて来る、それが三井家を去つて、世間一般の歴史の調にも大変大切な事です。ですから此方の三井を調べると云ふのは、たゞ御当家の歴史を調べるばかりぢやないのです。恰度今私が彼迎をやつて居りますが、どうかして其処を調べたいと思ひまして、一生懸命になつてやつて居ります。

○白塚 折角其処まで御丹精下さるのぢやで、相成るべくはさう云ふ、何処迄も遂げて見たいと云ふ志が出て来ぬと逆もいけませぬ、給料や御勤めの積りで調べて居つては逆も出来はしませぬ。

○柴 それで今日の三井家といふ名前は立派なもので、世間で何とも言ひませぬけれども、今日でなく、昔の処で斯う云ふものであつたと云ふことも、実は世間に知らしみたいのでありまして、他から見れば、下らぬ事を編纂室はやつて費用を使つて居ると云ふやうに見えるけれども、実はさう云ふ風の考を有つて居るのです。

○白塚 其等の事が又分つて来やうものなら、それは非常な

ものです。

○柴 少しつ、ポツッ調べて見ると非常に面白い、伊勢商人が江戸に来て、伊勢屋といふ暖簾をひろげた、それが家康の江戸に入った時でありますが、それより前に出店がある、小田原に一遍伊勢商人が来て尻を据えて、小田原が落城してから一緒に江戸に来た。やはり三井家御親類もそれをやつて来て居る、其跡がやはり小田原にある、山王原に三井といふ家の人の墓があるのです。

○白塚 酒匂の……

○柴 あれは本統です、けれども直接に今の御当家の筋ぢやありませんから、捨て、置いても宜いけれども、私の考では、どうしても円光院様の御兄弟か、お親しい筋の人です、系図に載つて居ります、其人の名前は雲津の次郎助、彼処の系図にも載つて居ります。それは御構ひにならぬでも宜しうございますけれども、やはり此方に見えた道筋がすつかり分つて居ります。それから富山の系図を見ても、皆それと似て居ります、小田原で尻を据へたと云ふことが——。それから他の御当家に関係のない歴史を見ても、小田原で尻を据へたことは分つて居りますから、江州から伊勢へ来て、伊勢から小田原へ来て、小田原から江戸へ来た、其の魁をいつも此方がやつて居る。それからもう一つ外に行つて調べたいのは御家の仕組、御兄弟の関係、これが何処か

ら出来たか、伊勢の発明ではありませんまい、又三井家の発明でもありますまい、江州の風ぢやないかと思ひます。子供が十五になつて商売に出る、江州が皆あれ、御宅々の昔のやり方も皆あれ、其辺が江州時代の仕組だらうと思ひます、さう云ふ処は成べく明にして置きたいと思つて居ります。始終旦那様にも申上げて居るのですが、もう變つたことは時々申上げます、其代り間違つたら消しますからと云つて居る。マアさう云ふやうな側とか、或は例の二本帯してはならぬと云ふ家風、又御一新の時の勤王とか、さう云ふ事を横から始終見て居るのです。

○白塚 それは誠に承つて私共大悦する、実に結構な事、それが大切です。

○柴 つまり私共の調と云ふのは其れなのでございます、唯旦那様のどなたが何時生れて、何時どうと云ふのは何でもない事です。

○白塚 そんな事は何でもない。

○柴 もう北（北家八代高棟、京都家高辰）さんにも、新町家高辰

う云ふ調をして、昔は斯うでございました、此の御家といふものは斯う云ふ御家風でございますと云ふことだけ申上げて御辞儀して去ります。あとは唯私共の書いた物を遺して行くといふだけの積りで、代々の御家風がどう、御家々々の御家風もございませう、御家の御用をなさる執事の

方々も、御当家は斯う云ふものだと云ふことを御存知ないと、仕事をなさるにも御不便が出来ます。それから世が開けて来ると、家庭教師といふ者が御宅々に入る、それが御家の風は斯様だといふことを知つてやらなければならぬ、唯世間一般のハイカラ風でお遣りになるといふことは如何と思ひます、と云ふことを申上げて居る。其代りさう云ふ調をした上で、不都合な事をしたと叱られ、ばそれ迄、昔からある其通り、此方は何も理窟は入れぬのですから……

○白塚 それ等が一体調べたいのぢや、もう御代々の何時死なれて何時生れたなど、云ふことは分りきつた話で、どの家にもある事だ。如何にもそれは御一新以来、全国の魔刀が当つて来て居るやうな事で、面白いものですナ。

○柴 面白うございますヨ、私共が今自分の学問としてあの帳面をいぢつて居る、さうすると誠に面白うございます。

○白塚 それは誠に喜ばしい事です。

○柴 それでいろく坊様、お嬢様方の教育でござりますナ、世間の修身の本など御覧にならぬでも宜い、此方に修身の例が沢山有るのです。御代々のお遣りなすつた事も、家来のやりました事も、其例を集めて来ると立派な修身の書物が出来、それは此方の御家風にちやんと合つて居る修身なんです。

○白塚 それ等が本当の教育の本だ。

○柴 これは余談でござりますが、岡と始終申して居る、もう少し手があつて暇だつたら、何時でも教科書を拵へる、それを御覧なさいと云つて差上げれば、自分の家の事ですから、皆様も御覧になり、家庭教師の方も、ちつとさう云ふ事を伺つて教育して貰はぬと、世間流のハイカラにやられると逆も駄目です。

○白塚 とても世間の今日の教育は、誰の目にも見えるだけの事より教へはしませぬからネ。

○柴 向ふはそれでも宜い、此方はそれでは足らぬのです。

それで今日議長(北家高様)さんは華族ですけれども、外様は皆平民、商売人だとして行つて居る、それが結構なのです、昔から町人だと云つて商売をなすつて居らしたつた、今日大倉みたいに華族にならなければならぬと云ふやうな考を持たれちや困る、矢張り何時が何時迄も御商売人で、惣領家は皆さんの代表で華族になつて居らつしやるから、それで宜いのぢやと吾々は考へて居る。大倉みたいに華族的にやらなければならぬと云ふことになる。それで宜いことも悪いことも、編纂室は皆聞いて居つて、差上げる物だけは差上げてしまはうと思つて居る。

○白塚 今の僅の間の処が掘出したいものですナ。

○柴 それは常に苦心して居ります。と云つて私共机の上で始終見て居るのですから、実地行つて見て来ないと可ない、

もうちつと奥深く入つて決めたいと思ひます。若し分らぬでも構はぬのです、続きが付かぬで、どなたの息子がどなたと行かぬでも、是から斯う来たものだと言ふ筋道さへ分れば、此間が分らぬとして差上げて置いても宜い。唯世間の家でありますと、皆系図書きが系図を拵へる、そんな系図でないと言ふことさへ明かにして置けば宜いと思ふ。

○白塚 あいつはかなはぬ、私共若い時分に覚えて居る、京都の何とか云ふ人でした、系図書きがあつて、一分づ、だつた、一番廉いのが一分持つて行くとちやんと拵へて呉れる。今随分相当の顔をして居る人で、それを持つて居るのがある、私共知つて居る人で——。それで頻に私の方は斯うちやつたあ、ちやつた、誰々の末孫だなど、言つて居るが、それはどうだと云ふと、私は一分で拵へて貰ふて居ることを知つて居るのだ。さうなつて来た、そんな物は仕方がない。

○柴 ですからそんな立派な事をせぬでも、分つて居る所だけで調べる、それより仕方が無いのですから……。

○白塚 それが本統の系図だ。

○柴 幸ひ円光院までは分つて居るのです、あの先がポツツリと分らぬ、大旦那が此間も、死んでもお前等調べるといふ御命令である、それは御歿りになつても何時迄も調べやうと云ふ積りでやつて居りますが……

○白塚 ほじくつて居つたら出て来さうなものですナ。

○柴 私は出来ると思つて居ります。

○白塚 どう云ふ処をほじくつたら出るか、それも御考に委せなければならぬけれども……

○柴 其代りほじくりますと、前に伝つて居る事が間違のこともある、例へば高蔭さんが御調になつた御存知の鯉江、あれなどはいけませんナ。

○白塚 あれ等は私も——高辰さんも鯉江のことを言つて居らる、けれども、どうも鯉江は、唯愚考で分りませぬけれども、余り面白くないやうに思つて居る。

○柴 是迄は鯉江の方の調で来たのです、どうもいけぬです、鯉江だけでは——けれども大事な高久さん、あれが中心ですから、あの人が調ばらぬと他が皆分らぬです。今度は高久さんがすつかり調ばりましたから——まだ京都には申上げてない、此間調べて、今度岡が持つて行く。其の高久さんが、私はすつかり調べたが、之にてハ鯉江ハ駄目ですワ、さうすると鯉江はいけなくなつてしまふ。高久が鯉江に築いて、永享年中に鯉江に居つたといふ事が載つて居る、それと合はぬ、除けた方が宜しうございます。唯高久さんが何処に居られたか、高久さんの居られた場所の調です。

○白塚 何にせん、其時分の事を調べやうと云ふのは容易ぢやない。

○柴 私が高久さんの實際をつたといふことを調べたのは、タツタ一行、京の東寺の執行が書いた日記がある、それにタツタ一行あるのです。それから考へ出して来たのですが、仮に兄弟が三人居られた、高久のお父さんの満綱、其お父さんと喧嘩した。つまり高久さんと高久さんの兄さんと二人が寄つて、お父さんと兄さんと戦争して負けました、自分が世を取る積りだつた。高久といふ名はありませんが、自分ども、ちよつと一行書いてある、三男六郎といふやうな処から段々調べて来て、いろ／＼其頃のお公卿の日記二種類、当時の他の物をいろ／＼集めて漸く分つて来て、大体年も分つて、もうどんな博士が来てても動かない。さうすると今度はもう少しです、つまり御庭の飛石を飛んで、先の処まで行つたのですから、其間の僅かの処なのです。少し引掛りがありますから、それを引掛けて見て行かうと思つて居ります。岡も今度京都へ行つて、少しは申上げて居るだらうと思ひます、彼方の命令があれば、少し動いて見る積りですけれども、鯉江が可怪しくなると、愛知川の近辺に居られたらしい、さうすると恰度藤堂さんときつかり合つて来るのです。

○白塚 藤堂さんのあれはどう云ふのです。

○柴 藤堂さんは高久さんから出て来たとなつて居る、其系図の名前と此方のと、稍似て居るけれども少し違ふ、そこ

は何方が何うとも言へぬのです。此方のは困つたことには江源武鑑といふのがあつて、あれが邪魔して仕方がない、あの分だけ除いてしまはなければならぬ。併し鯉江をやめてしまふと、藤堂さんとの関係がきつかり付く、藤堂の方で伝へて居ることが、本当らしい事を伝へて居りますから……

○白塚 是には何か書類があるだらう。

○柴 けれども其書類は、彼処の初代ですネ、高虎といふ人の拵へた書類。所が其時に居つた老人があつて、其話を聞いたもの、それに鯉江の事ハ一つも無い。だから此方の鯉江がいけないと云ふことになると巧く合ふ、どうも其処は藤堂の方が宜いやうです。

○白塚 津の川口、かの結城神社の碑を拵へて、公儀から察度が入つて池の中へ投り込んでしまつた、あれも川口で、それを後から掘出したのでせう、彼辺から何ぞ……。あの男は私も朋友でありましたが、えらい斯う云ふ事が好きで、あの男が今居ると、随分人の事でもよく調べて居つて、遂にあの結城神社も引張り出して来たですナ。それに本居宣長の社を立てるに付ても、私共は発起人の中ぢやが、私が東京に出て来るに付て、そんな事に突掛つても居られず、各国に關係して来るもので、川口にやつて呉れと云つて、托して置いて私共逃出して来たのですが、私は東京へ来て

しまふ、宗十郎さんは歿くなられたものですに依て、とう／＼それでも自分一人で引受けて、彼処までやつたですナ。それから結城を又二度までやつて居る。なか／＼此人も根気のいい、男で、えらい北畠から楠公好きで、楠公から調べて来て居る男です。私が横浜に居る時分に、東京に出て来ると私共に泊つて、面白い男でしたが、あの男が居ると私が相手にするに宜いと思ふのですが、惜いことに歿くになりました。

○柴 まだ伊勢と江州とは充分調べる余地がある、大学で三上さんの方でいろ／＼調べて居るが、伊勢江州二つは本当に手が入つて居らぬ、大学でも分らぬ。それですから此方で自分の都合の好いやうに手を嵌めてやれば、出て来ぬとは言へぬのです。もうポツチリでも宜い、今申した三男六郎が兄を討つたと云ふ一行あれば、それだけでも続きにするのですから、どうかして出したいと思ふのです。現に円光院殿のは、原物はまだ私は見ませぬ、写ですけれども、円光院殿の名前の入つたのが鳥須の役場にあるのです、雲津の本郷から少し海辺に倚りまして、海水浴場の鳥須といふ、彼処の村役場の書類にある、三井越後といふ。

○白塚 あれは松坂別邸に留守居をして居る川北、あの男が鳥須の役場の書記をして居る者と、ごく心易くして居る。

○柴 それは前に次郎助の処へ行つて話して来たのです、そ

れは京都の大旦那の御許を受けて、議長の御許しを請けて行つて来ました、嵐と二人。それから次郎にいろ／＼話を聞いて、其指図で鳥須に行つた。役場に行つて御覧なさいと云ふから、役場に行つて見ました。こんな長持に一杯ある、引繰返して見たところが無い、裁判の事で農商務省に出してある、それが帰つて来たから見せますと云ふことで、写だけ見ました。まだもう一つあると云ふ事でしたが、どうしても見えない、三井越後といふ文句があるのです。もう一遍次郎の処へ行つて見たいのです、先達でも北さんに申上げましたけれども、今は少し工合が悪い、今度は川北に言つて彼方から……

○白塚 さうしたら欠さずに見せるワ。

○柴 さもなくとも、大学から引張り出して来れば行けるのですけれども、物を指定して何々を出せと云ふなら行ける行つて何かといふ奴は、此方が行つて引繰返さなければいけない。デ写は取つてあります、原物をもう少し見たいと思つて居る。それから次郎の家にもあるのです。

○白塚 次郎の家にあるか何うか知らんテ。

○柴 先達で行つた時は、病気で津に来て居つて、本郷の家にあるから、病気が癒つたら彼方へ行つて見せると云ふ。私は決して御当家に迷惑はかけぬから見ませう、見て、是は宜いものでよい、是は駄目ですと一言云つて置けば宜い

のだから、私の研究の上から見て、つまり良くても悪くても駄目ですと言ふ積りで出掛けませうといふ話は申上げて置いた。責任は私にございます、駄目ですと言つて来ますからと云ふて行つた所が、生憎此方へ置いてないから、出直して来て呉れと云ふ。話の要領だけは聴いて来ましたが、それで宜いのです、つまり此方に利益さへすれば宜いのですから、先方のを宜いとさへ言はなければ宜い。所が見た中に良い物はありません、此方も専門家で専らやつて居るといふことは言つてありますから、先方も何とも言へぬ、分ることなら私の家の事も調べてくれと云ふ。それは此方の仕事の余分に、分りさへすれば調べて上げると云ふ、学者としては何方も違ふ訳はないのですから……

○白塚 どうもあの次郎が、是迄も度々いろ／＼な事を無心に來たり何かして、私も北さんから、本郷が出て來たで一つ行つて断つて呉れと云はれたりして、始終いろ／＼御使したのですが……

○柴 あれは本郷がやつて來ましたら、實際をお話になれば宜いと思ふ、此方と組織が違ふ、お前の処はよその家になつて居るのだから、此方に嵌められぬ、お前の家はお前の家だとハッキリ言ふ方が宜いと思ひます。

○白塚 隠したり、会はんだり、言はなんだりすると、先方でも益々疑つて宜くないです。

○柴 田舎者ですから、御家のどう云ふ事か實際知らないのです。

○白塚 伊勢でも松坂さんが、前の何からの続きで、御年頭や名乗は遣取してござるけれども、京都はちつともせず、今の当主の親父さんは私共ごく懇意で、始終彼方に居つたものだから、あすこの家へも行くし、見れば泊つたり何かしましたが、今の若いのは、却て三百代言をしたり何かして居つたもので、理窟張つて來て、今は年取つたでそんな事も言ふまいけれども……

○柴 あまり理窟は言ひませぬでした。

○白塚 一いきはさう云ふ風がありました、何かあつたら引掛らうと云ふやうな工合でした。

○柴 私等は宜いのです、引掛つて來た所が、此方は、御家の人でもなし、事務局の間でもなし、吾々は調べる事だけ頼まれて居るのだから、君等勝手に言ひたまへ、若し調ばつて、本当に付いて居るのなら君の処には便利なんだから、何でもお出しなさい、本当に附いて居ることが分れば、調べの結果本当の事を彼方へ復命するだけだから、出した方が得ですと云ふた所が、いかにも、何でも言ひますと云つて、何でも彼でも話する。さうして見た所で、どうもくつき様がないと云つて帰つて來るのだから仕方がない。それでは本郷に物がありませんから見て下さい、見て上げま

すと斯う言ふて来たのですから……

○白塚 私が行くと、前からの関係もあるから、斯うも言ふて呉れたら、あ、も言ふて呉れたらと云ふことになるから……

○柴 近來はあらはに行くです。

○白塚 却て内輪の事を言ふと宜くない哩、いろ／＼な事を托されるし。

○柴 ですから却て無責任で宜いのです、嘘は出来ぬから、貴方の方に都合の好いやうに、沢山材料をお出しなさいと云つて見て来る。北さんの宗陸七代高藏 宗六に同じさんの御画きになつたものがある、円光院さん、それから其お父さんの極彩色の肖像があります、それは画としては能く出来て居ます。宗六さんから戴いて居るのだと、非常に自慢して居りました。それは偽物ではない、本当の牧山といふ印まである、さう云ふ物を戴いてある。是は偽物ぢやありませんか、さうでございますナ……此方は知つて居るけれども、偽物にして置かぬといかぬ。

○白塚 三井義喬の家にも「水草や何とやらして岸に咲く」此の通に分れては居るけれども、根は一つだといふやうな何があつた。

○柴 高蔭さんでせう。

○白塚 発句ぢや、高蔭さんではございませぬ。

○柴 小野田さんですか。

○白塚 古いのです、是は先代から斯うやつて大切に居るのだで、其通に根は同じ一つのものだ、今日は西に咲いてる東に咲いてると云ふだけで、根は一つのものだに依つて、君の処とはどうしても離れないのぢやと言ふて居つた。

○柴 そんなのが出て来ると、ちやんと私共考へて居る、天照大神が吾々の先祖だから、天子様も吾々も皆根は一つだとさう言つて居る。私実は考へたのです、何時でもそれをやるけれども、マアあなたの処も元は一つでせうと言つて来る、さうすれば先方が勝手のやうに聞きますから、どうでも宜いのです。

○白塚 全くさうぢや。けれども私共どう考へて見ても、貴所の処の名が違ふやうだ、弥市といふ名も違ふし、元々三井弥市といふ人が別にある、あの時分に三井と名乗つた人は何人もあるで、是は大変に違ふ。さうぢやらうか。それは違ふ。貴所さう思ふて居るか知らぬが、私の親父が所司代に附いて京都に行つた時に、年頭などに出て、私の方は玄関から上つて行く、八郎右衛門といふ人が来ると潜門から入つて、さうして内玄関に入れる、座敷に通つてからは別に何だけれども、まあ／＼さう云ふやうな有様——是はマア幕府の例と云つても仕方がないけれども、さう云ふ事を度々やり、此方から行つても、御馳走をしられて歸つて

来たことも、前に私は親父から聞いて居ると云つて、頻に述べて居つたです。

○柴 あれは此方の政略なんです。

○白塚 何しろ旧幕の末であるものに依て、何でもハイ〜と云つ置けばそれで済むぢやで……。

○柴 それで例の町奉行の三井采女といふのがある、あの筋ですからね、町奉行の旗下の三井、あれが彼方へ来て居りましたから、店の者はハイ〜言つて居ります。さうして申渡も出て居る、御紋も同じだからハイ〜言へといふ。商売人だからハイ〜言つて居る、其癖が付いて居る、先方は親類としてやつて居ると思ふが、此方は役人としてやつて居る。

○白塚 それなんだナ、尤も三井といふのは二つあります、此四谷の何とか云ふた寺に三井があるし、三井義高といふ人の、其の首を斬つて出た戦功に依つて、墓は芝の増上寺にある、四谷にも一人ある。

○柴 四谷のは江州ですか。

○白塚 これが何処だか分らぬ、私も捜したけれども分らぬ、三井何とか云ふた。

○柴 長州にもあります、それは三井といふ。

○白塚 此方のも三井かも知れぬぢやナ。紀州家にも一人三井と云ふのがある。

○柴 孫左右衛門。

○白塚 これも私心易いので調べに行きましたが、これハ先代が豊橋だ。

○柴 彼処は分りませぬ、何故なれば松樹院様の頃に先方から手紙をよこして居ります、私の家の系図が分らぬ、何でも高安といふ人から出て居るから系図を見せて下さい、お頼み申しますと云つて手紙が来て居る、だから有つても此方の系図を写した訳になる。

○白塚 系図は無い。さうして其人の古い書類には、系図が少し出て居る、其終の方は当時の人が立派に書いてあるけれども、初が豊橋の人だ、豊橋に居つて豊橋三井と云つたけれどもそれは若州から敦賀に行つて、俄に戦が起つて夏の事で裸躰で居つたものだから、禪に刀を帯して裸躰で飛出したことがある。それが徳川家へ皆書いて出すのぢやナ、其の写に裸躰で刀を帯して出たといふことが有りました、そこらは頓と戦国の何があるけれども、どうも中途から此方と同じものになつて来て居る。

○柴 此方のをくつ付けて貰つて行くのです。

○白塚 何処からか訳分らずに繋がつて来たんぢやナ。

○柴 さうしていろ〜の処を捜して見ると随分あります。ですから兎に角分る所だけはやつて見ないと、折角長いこと掛つてやり出した甲斐がない、是迄大体の事は昔から調

べてあるのですから……、どうも伊勢には困ります、高蔭さんの時にあまりあ、云ふ事をやつたものですから、却て害になつた。

○白塚 あれからぢやらうと思ふ、あれから方々に出て居る。彼処の来迎寺に三井十兵衛とか云ふ立派な墓がある。

○柴 松坂さんの御墓の後の方、新墓を入つて右の方の処

……

○白塚 右の入つた処にずっと列んで——あれは今息子は遺つて居ります。

○柴 あれは紀州でせう。

○白塚 あれは三井三左衛門といふのがありませう、出水さんの方の何ぢやと云ふことで……

○柴 あなたの仰しやるのは三郎左衛門。

○白塚 三郎左衛門、あれはどうなつて居るのか。

○柴 彼処の跡は分らぬです。釘拔さんと三郎兵衛、あれは分らないのです、もう宝曆、明和、安永で無くなつてしまつたのです。今日岡が行つて戴きます書類の中に、ちよつと其氣の物が有りさうなのです。

○白塚 それから私は履歴書があつて、それを写したものを岡氏の処へ上げて置いたのです。

○柴 あれ一つ写がありますが、今度あれの本でありますか、似寄つた物があるらしいです、頂戴する物の中に——。去

年五月大旦那が入つた時に申上げて置いた、斯う云ふ書類が有るらしくて、此方に来て居りませぬが……それは自分の手許にあるかも知れぬと云はれて、願つてあるのです、折角あちらの方でもいろく御熱心になすつて下さるので、吾々も一生懸命やらなければならぬと思つてやつて居ります。

○白塚 これは岡氏の方へ上げてある、先方できう云ふて居るだけのもので、何もならぬものだけでも、それにした所が参考になるに依つて……

○柴 話といふものは馬鹿に出来ませぬ、嘘の話もくつ付いて居るけれども、嘘でも宜いのです、何故嘘を拵へたかと云ふ訳が大切なんです。ですから何時も申して居る、嘘でも本当でも——先程の池鯉鮒でもさうです、嘘は嘘として扱ふ、こんな処まで此方の名前が知れ渡つて居る。其考から今日の伊藤松坂でも、ア、さうだと行けるのですからネ。伊藤松坂を一つ調べて見ませう。

○白塚 私も其時分から思つて居るのですけれども、それなりけりになりましたが、何しろ此方に居ると、さう勝手に飛出して……

○柴 まだ近い処で行つて見たい所があるのです、京橋伝馬町に三井といふ家が軒ある、海苔鱈節を売つて居る、其処まで突留めてあります、少し調べなければならぬ訳があ

るのですけれども……

○白塚 此間私が、京橋の建物会社をして居る木村衆一といふ者がある、其処へ用があつて行きましたら、其の此方の方に、電信柱に向けて三井何とか云ふ広告が貼付けてあつた、白で書いたやつが——どうも三井といふ家もなか／＼有るもんぢやなと思つて……

○柴 あの伝馬町の家は分つて居る、向ふは知りませぬが私の方では分つて居る、つまり釘抜さんの方の側で、すつかり調べは付いて居る、其跡が何処へ行つたかといろ／＼調べて、彼処の家になつて居る。行つて聴けば教えてやるやうなもので、教えに行くだけでは仕方がないから、何かあれば引張り出さうと思つて居る。

○白塚 吉原にも三井といふ家が一軒あります。

○柴 伝馬町の三井は井桁を使つて居るのです。何しろ松樹院様の御兄様の筋の、従兄弟か何か、其人が江戸に来て御蠟燭屋をやつて、幕府の蠟燭師になつて、それからズツと来て鍛冶町まで来て、御一新の時何処か退転した。どうもそれが本郷にランプ屋がある、其ランプ屋と関係が有りきうなので、ランプを買つたり何かしていろ／＼ごまかして聞いたら、私の本家は彼処にある、海苔屋で斯う／＼だと云ふ、もうそれですつかり分つて居る。此方は筋道は分つて居るけれども、行つたつて教えに行くだけのものだから

行かない。それで通つて見れば、ちやんと井桁三文字の海

苔の看板を使つて居る。さう云ふのは宜いですが、突然にポカツと三井の親類だなど、言ふて来られると困る。あの北家の少し先に行つて、三河台に淨因寺といふ寺がある、それに三井某といふ墓が二つある、墓地改正で取除になるものですから、あなたの家の墓ぢやないかと云つて、北さんの処へ坊様から手紙が来た。調べると仰せられて、此方の墓ぢやありませぬ、何処の者か見て来いといふ仰せ。それから行つて過去帳を繰つたりいろ／＼したら分りました、長州の士、先方も半分は喜んで居りましたけれども、半分は失望して居つた。此方の三井ぢやありませぬけれども、何処の人が調べに来ました。それで半分失望して居つたけれども、此方で嘘を言ふかと思つて疑つて居つたらしい、それから過去帳を見て、斯う／＼だと云つて説明してやりましたら、半分喜んだが半分失望した、先方の帳面ですつかり分つてしまつたのですから……

○白塚 あまり判然し過ぎても困るでせう、同姓が無いとも言へないから……

○柴 それはミツキぢやない、ミキと読むのだと教えてやつて来ました。

○白塚 御井といふ奴があるからナ、私が行つた岐卓のなども御井村ですナ。

○柴 今何と云ひますか丹羽郡ですナ、あれは御井から出て来て居るのです。

○白塚 尤も江州の八幡の近所に御井といふ処がありますナ。

○柴 さうですか、それはまだ私伺ひませぬ、どの辺ですか。

○白塚 御井と書いてあつてミヅといふ。私共其後行つて見やうと思つて居るのですけれども、いまの三井義喬の三井弥市といふ人が其処に居つたやうになつて居る。

○柴 歸つて一つ調べて見ませう。

○白塚 何でも八幡の近所だ。

○柴 江州で御井でも三井でも宜しいが、井の付く処ハ残らず大体調べて見なければならぬです。

○白塚 何でも御井といふ処がある。

○柴 それで今の村名には無いけれども、字にあるだらうと云ふ、これは調べることが出来ないと云つて手を引きましたが、八幡の近辺ですと、それで又調べて見ませう。野洲郡の井路、用水池に三井何とあるなど、云ふ、それ等も来歴を聞いていろ／＼調べたり何かして大騒動したこともあるが、それは違つて居る。それは一つ調べませう。

○白塚 何でもさう云ふ事は、私近頃江州の方にちと懇意な者が出来たで、其地方の者だに依つて万一知つて居るかも知れぬと思つて、一遍尋ねにやらうと思つてまだ能う遣りませぬが、漸く昨年から懇意になつただけけれども、尋ね

やうか知らんと思つて居つた。

○柴 さうでございますか、それは早速調べて見ませう。

○白塚 何でも山手の方ちや、湖水の方ちやない、山手の方に倚つた処に御井といふ処がある、それはミヅと称へると云ふ話だ。

○柴 ミヅでもそれは宜い、御当家も初はミヅで云つて居つたか、ミツヅで言つて居つたか分りはしませぬ。

○白塚 紀三井寺と同じことで、御詠歌でも勤める折は紀三井寺といふけれども、文字ちやとミツヅと斯う云ふに違ひない。

○柴 それは一つ調べて見ませう、鯉江を毀ちますと、毀つだけでは仕方がない、何処かに在つたと云ふ処を出さなければならぬ。折角言ひ伝へ来たことを無闇に毀つ訳に行かぬ、怪しいが斯う云ふ様に伝へて居るといつて出さなければならぬ。毀つ為に調べるのぢやない、善い物を持つて来る為に毀つのですから、本當の処を持つて来て之を取るのには宜いけれども……

○白塚 それはもう一層御尽力を望みます、一番大切な処ですから……

○柴 今私が一人で責任を負つてやることになつて居るから、京都にも申上げ、是非私にせよといふ、私一人の責任ですから、どうしたつて遣り遂げなければ申訳がない。

○白塚 とても責任を分けたら駄目です、決して成功しない。

○柴 今日は誠に長くお邪魔をしまして……

○白塚 尚どうぞお話の都合で、私の方から出掛けても宜しい、宅の方は朝ちやんと申継ぐものだけ申継いで置けば、何も他に用がありませんで、臨時の事があれば格別、左もなければ別に居らんならぬと云ふことも無いで、何時なりと出ます。又此方へ御出のことなれば、御覧の通り斯う云ふ処で御目に懸らねばならぬやうな事で、誠に不都合でございますが、若し何なら、彼方の自宅の方へお出下さつても宜しい。

(畢)